

茨城県教育財団文化財調査報告第374集

宮 田 館 跡

主要地方道玉里水戸線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

み や た やかた あと
宮 田 館 跡

主要地方道玉里水戸線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、県内全域の発展とその調和を図るため、沿線各地域の円滑で安全な道路網の整備を推進しているところです。

その一環として、茨城県水戸土木事務所は、小美玉市宮田地区において、主要地方道玉里水戸線の道路改良事業を計画しました。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である宮田館跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、宮田館跡は平成23年4月から6月までの3か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、宮田館跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、小美玉市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木欣一

例　　言

1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財團（現 公益財団法人茨城県教育財團）が平成 23 年度に発掘調査を実施した、茨城県小美玉市宮田字コヤノ山 111 - 7 番地ほかに所在する宮田館跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

　　調査 平成 23 年 4 月 1 日～6 月 30 日

　　整理 平成 24 年 9 月 1 日～10 月 31 日

3 発掘調査は、調査課長権村宣行のもと、以下の者が担当した。

　　首席調査員兼班長 稲田義弘 平成 23 年 4 月 1 日～6 月 30 日

　　首席調査員 荒磯克一郎 平成 23 年 4 月 1 日～6 月 30 日

　　調査員 田村雅樹 平成 23 年 4 月 1 日～6 月 30 日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、以下の者が担当した。

　　調査員 田村雅樹 平成 24 年 9 月 1 日～10 月 31 日

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第 IX 系座標に準拠し、X = + 21,320 m, Y = + 46,040 m の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …, 西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j, 西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SA - 土塁跡 SB - 掘立柱建物跡 SD - 堀跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 施釉

 機械土器断面

 煤付着

● 土器

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
宮田館跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	14
1 戦国時代の遺構と遺物	14
(1) 曲輪跡	14
(2) 掘立柱建物跡	18
(3) 土壙跡	20
(4) 堀跡	22
(5) 土坑	26
2 遺構外出土遺物	28
第4節 まとめ	31
写真図版	PL 1 ~ PL 8
抄 錄	

宮田館跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

宮田館跡は、小美玉市の中南部に位置し、霞ヶ浦に注ぐ園部川下流域の左岸、標高 22 m の台地上に立地しています。

当館跡は主要地方道玉里水戸線道路改良事業に伴い、遺跡の記録保存を目的として、茨城県教育財團が平成 23 年 4 月から 6 月まで、道路の改良部分にあたる 934m³について発掘調査をおこないました。



調査の内容

調査の結果、戦国時代（約 500 年前）の曲輪跡 2 区画、堀立柱建物跡 1 棟、土壙跡 2 条、堀跡 1 条、土坑 1 基を確認しました。当館跡に関わる出土遺物は、土師質土器（皿・内耳鍋）、石製品（火打ち石）、金属製品（鉄砲玉）です。当館跡は、行方台地の西端部に位置しており、舌状に張り出した高台の先端部分を利用して築城されています。



調査区全景（南上空から）



掘立柱建物（矢倉カ）跡の調査風景



断面がV字形の深い堀（薬研堀）



土師質土器の皿が出土した状況



出土した土師質土器の皿や内耳鍋、鉄砲玉

調査の結果

宮田館跡は、園部川下流域や対岸を一望できる地点に築城されています。舌状台地の先端に築かれた曲輪では、掘立柱建物跡が確認され、矢倉が想定されます。また、この曲輪を守るために土壘や深い堀（薬研堀）が巡らされています。

出土遺物は16世紀の所産ですが、日常品である土師質土器の皿や内耳鍋などに限られ、高級品や威信財として用いられた陶磁器は確認されていません。出土点数が非常に少ないことも特徴です。

戦国時代における園部川下流域は、西岸に大塚氏、東岸には園部氏が勢力を伸ばしており、霞ヶ浦や園部川の水運を睨んで、領主権を争った地域でした。また府中（現石岡市）や竹原方面からの陸路は宮田館で接続し、小川や堅倉方面へ抜けていく交通の要所もありました。

この宮田館は園部氏の支城として、大塚氏の動向を警戒するとともに、交通路を押さえる役割を担った前線の城館であったことを示しています。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、小美玉市において主要地方道玉里水戸線の道路改良事業をおこなっている。

平成22年4月1日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道玉里水戸線道路改良事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は平成22年6月3日に現地踏査を、続いて6月22日に試掘調査を実施し、宮田館跡の所在を確認した。平成22年7月30日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内において宮田館跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成22年8月11日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘を通知した。平成22年9月27日、茨城県教育委員会教育長は遺跡の現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県水戸土木事務所長に対し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年10月12日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対し、主要地方道玉里水戸線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年2月22日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長に宮田館跡における発掘調査の範囲及び面積について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財團法人茨城県教育財團（平成24年4月から公益財團法人茨城県教育財團）を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、委託者から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成23年4月1日から6月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

宮田館跡の調査は、平成23年4月1日から6月30日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月	5月	6月
調査準備 表土除去確認 遺構確認				
遺構調査				
遺物洗浄 注写真整理				
補足調査 撤収				

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

宮田館跡は、茨城県小美玉市宮田字コヤノ山111-7番地ほかに所在している。

小美玉市は、茨城県の中央部に位置し、巴川と園部川に挟まれた標高30mを主とする行方台地と、園部川河口付近から西部へと広がる標高20m前後の出島・石岡台地によって二分されている。

これらの洪積台地からは、先の2河川に加えた鎌田川、梶無川の4河川が、支流を集めて北浦や霞ヶ浦へと流入し、その過程で形成された谷津や沖積地が樹枝状で複雑に開析されている。特に巴川と園部川の沿岸においては、細長く発達した沖積地が形成されている¹⁾。

当遺跡が所在する行方台地の西端部は、台地中央部から緩やかに下り標高25mほどとなり、園部川に沿って北西へと延び、やがては吾国山の東麓へと達している。

この台地を形成している地層は、下層位から、石崎層、志崎層、笠神層、見和層（成田層に相当）、茨城粘土層（常総粘土層に相当）、関東ローム層、そして現在の生活面も含む沖積層と続く。石崎層、志崎層、笠神層は内湾底堆積、見和層は下末吉海進時の外洋から干潟に至る堆積で第四期洪積古東京湾時代のものである。茨城粘土層からは陸成堆積となり、関東ローム層は火山灰堆積となる²⁾。

当遺跡は、園部川の沖積地から幾重にも延びる谷津によって区切られた標高22mの台地上に位置しており、沖積地からは段丘状に尾根がせりあがった後、緩やかな傾斜地を形成している。現在の当遺跡周辺は、園部川沿岸の沖積地には水田が営まれ、台地上は山林や畠地として土地利用されている。

第2節 歴史的環境

宮田館跡（1）は、行方台地の西端部に位置し、西方に園部川や出島・石岡台地を望んで築城されている。園部川の両岸においては、分布調査によって確認された多くの遺跡から、古くから人々の生活が営まれてきたことをうかがい知ることができる。特に霞ヶ浦に面した地域から園部川河口付近の台地上には遺跡分布が密で、各時代の人々が、霞ヶ浦やそれに注ぎ込む河川を生活に取り込みながら、有効的に利用していたことを知ることができる。なお本節では、園部川下流域を中心に記すこととする。

旧石器時代の遺跡は、ガラス質黒色安山岩製のナイフ形石器が採集された富士峯遺跡や硬質真岩製の尖頭器が採集された出日遺跡、ナイフ形石器、台形様石器が出土した熊山遺跡が知られている。これらの他、香取下遺跡（31）や千部塚遺跡（51）、栗又四ヶ遺跡（66）、大作台遺跡などでも確認されているが、全体的な分布は薄い。

縄文時代になると、その遺跡数は爆発的に増加し、自然環境に育まれた狩猟・採取による生活の痕跡をうかがい知ることができる。小美玉市においては、草創期の遺跡こそ現時点では希薄であるが、早期以降中期にかけて急速に増加する。園部川下流域では、右岸の木田谷遺跡（40）、八幡脇貝塚（43）、宮後貝塚（53）、館山遺跡、左岸の兵助山遺跡（6）、池下北町遺跡（11）、原口遺跡（24）、古城ノ内遺跡（30）などが早期から中期の遺跡に該当している。当遺跡においても、櫛系文や沈線紋、条痕文、波状貝殻文などの土器器片が採集されている。しかし後期以降では遺跡が急減する特徴がみられる。また、早期から前期の遺跡と中期の遺跡が形成

される台地が、谷津を境に異なる場合があり、中期から後期にかけて遺跡群の社会的構造の変化が生じた可能性も指摘されている⁹。

弥生時代の遺跡は梶無川以西で確認されているが、少數である。それでも沢目川が園部川へ合流する近辺には庄司ノ上遺跡（7）や火打久保上遺跡（8）が所在し、園部川右岸では香取下遺跡、東前遺跡（36）、桜久保遺跡（47）、千部塚遺跡、栗又四ヶ遺跡、磐陀ノ台遺跡（76）などが谷津口やその奥に面した台地上に位置している。わずかに採集された土器片から、弥生時代後期に属するものが多いようである¹⁰。

古墳時代の園部川下流域には、いくつかの古墳や古墳群の形成がみられる。前期には羽黒山古墳を中心とする羽黒山古墳群、後期には要害山1号墳を伴う要害山古墳群（75）、木船塚古墳を伴う木船塚古墳群（58）が所在する¹¹。この他にも大塚古墳（22）や権現山古墳、円筒型埴輪や朝顔型埴輪が出土した地蔵塚古墳¹²などが河口付近に多数存在し、これらを中心とした幾つかの古墳群が存在した可能性が考えられる。また多くの古墳の被葬者である有力者が基盤とした集落跡も推測されており、羽黒山古墳における羽黒遺跡¹³や大塚古墳における西ノ前遺跡（23）、地蔵塚古墳における羽根坂遺跡がそれらに該当するとされている。なお、中期には園部川下流域において古墳群の形成はなされておらず、恋瀬川下流域に形成された舟塚山古墳群（北関東第2位の規模を有する舟塚山古墳を含む）に墳墓は集中している¹⁴。

奈良・平安時代の市域は常陸国茨城郡に属し、「和名類聚抄」に記されている田余郷・白川郷・立花郷・生園郷・山前郷に比定されている。当遺跡が所在する宮田地区は生園郷に含まれると考えられている¹⁵。近辺の発掘調査では、区画が確認された宮平遺跡（18）や集落遺跡である天神遺跡などがあげられるが、その事例は少ない。遺跡の分布からは兵助山遺跡、天神平遺跡（20）、堂ノ上遺跡（25）など該期の遺跡とされるものは多数みられる。宮田館跡周辺遺跡分布図（第1図）の範囲内ではあるが、律令期に位置づけられている遺跡は古墳の所在地より離れているものが多く、古墳時代から継続する遺跡においては古墳付近に所在するものと、離れるものが見受けられる。律令期に成立する集落、律令社会の中で早期段階で順応するグループや伝統を守るグループの存在などが推測されるが、解明には資料の蓄積を待たなくてはならない。

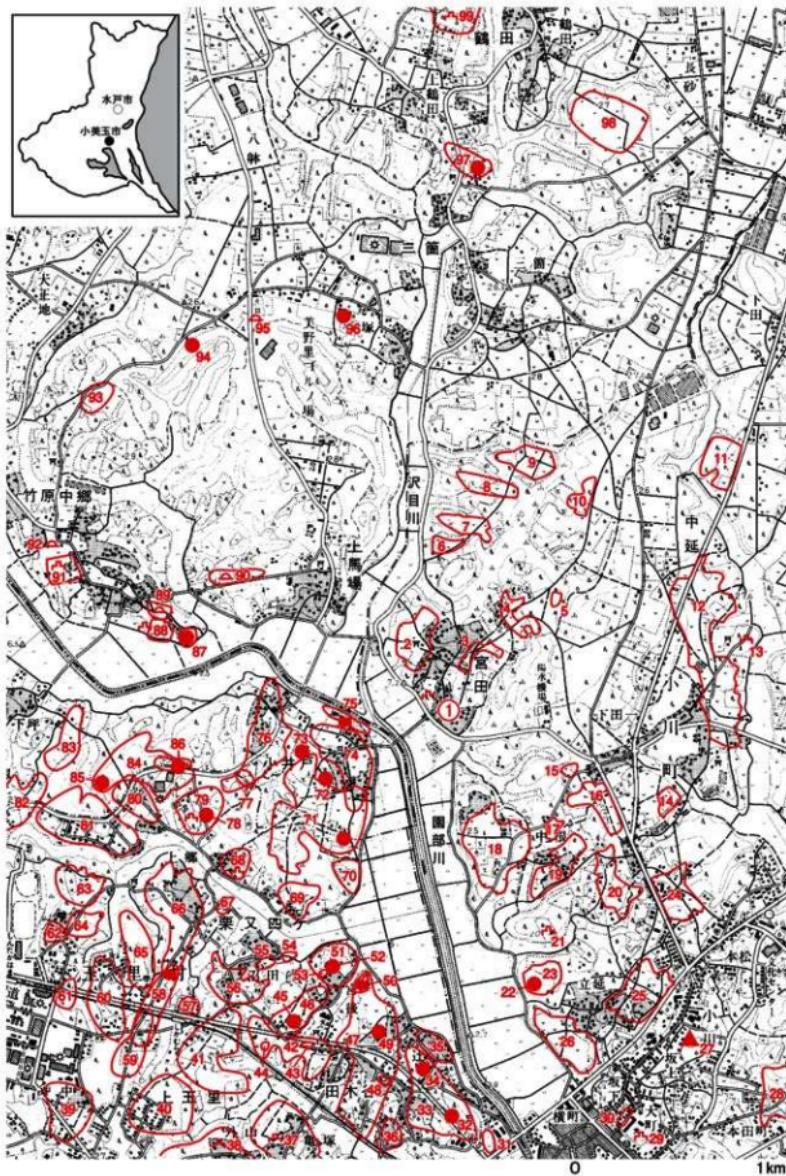
中世における当地域は、大掾氏・小田氏・江戸氏・佐竹氏などの抗争の場となった。以下に諸氏の動向¹⁶及び、宮田館跡に関わる歴史的環境を記すこととする。

鎌倉時代初頭、常陸国の守護として入部した八田知家やその惣領の系譜である小田氏が勢力を伸長させた。小田氏の所領は小田城（つくば市）を中心に東は現在の茨城町や小美玉市、西は千代田町、南は土浦市や美浦村へ達しており、大掾氏が所領としていた府中（現在の石岡市街近辺）を取り囲むように形成されていた。しかし北条氏の得宗政治や南北朝の内乱を通して、所領はめぐらしく消長を繰り返した。

南北・室町時代においては惣領制の解体時期にあたる。鎌倉公方の専横政治に対する不満は、上杉憲秀の乱において、主として、鎌倉公方には庶子家が、憲秀には惣領家が与する構図へと発展した。常陸国においても大掾氏・小田氏などの惣領家は憲秀であったが、憲秀が敗れると、鎌倉公方の勢力拡大化を恐れた将軍に京都扶持衆として抱えられた。

この頃の大掾氏は府中と本貫地の水戸との間を行き交って政務を執りおこなっていた。鎌倉公方方の江戸氏は、大掾氏が府中へ赴いた際に乘じて水戸を奪取し、大掾氏の勢力を弱体化させた。さらに江戸氏は、大掾氏や小田氏との争いを激化させ、天文元（1532）年には小幡城を奪取し、南進のための拠点としたのである。

戦国時代の関東においては、北進する後北条氏と佐竹氏を中心とした北関東の領主連合との対峙の構図となる。佐竹氏方においては、領主間の所領問題を抱え、離合集散が繰り返され、小田氏などの勢力は後北条氏方へ取り込まれていった。しかし、中央で豊臣氏が権力を持つと、佐竹氏はこれと結びついて勢力を盛り返した。



第1図 宮田館跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「石岡」）

表1 宮田館跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
		器	文	生	埴	奈良・平安	中世			器	文	生	埴	奈良・平安	中世
①	宮田館跡						○	51	千部塚遺跡	○	○	○	○	○	○
2	殿畠遺跡	○		○				52	千部塚					○	○
3	東ノ上遺跡	○						53	宮後貝塚						
4	ハサマ遺跡	○		○				54	寺塔遺跡	○		○			
5	三藏久保遺跡			○				55	沼田遺跡				○		○
6	兵助山遺跡	○				○		56	沼田平遺跡	○	○	○	○		
7	庄司ノ上遺跡	○	○	○				57	大塚古墳群						
8	火打久保上遺跡	○	○					58	木船塚古墳群						
9	西原遺跡	○						59	石橋遺跡	○		○	○		
10	大峰遺跡	○						60	木ノ内遺跡	○					
11	池下北町遺跡	○						61	観音峰遺跡						
12	十一平遺跡	○		○				62	細田遺跡	○	○	○			
13	下田城跡					○		63	山ノ神遺跡	○	○	○	○		
14	乾谷遺跡	○						64	原田向遺跡	○	○	○	○		
15	白旗後遺跡	○						65	大山遺跡	○	○	○	○		
16	宮久保遺跡	○						66	栗又四ヶ遺跡	○	○	○	○		
17	白旗前遺跡			○				67	安楽寺阿弥陀堂跡				○		
18	宮平遺跡	○		○	○			68	殿塚館跡	○	○	○	○		
19	終平遺跡	○		○				69	極楽寺遺跡						
20	天神平遺跡	○				○		70	駒崎遺跡	○	○	○	○		
21	中根城跡							71	境塚古墳						
22	大塚古墳			○				72	天神山古墳						
23	西ノ前遺跡	○		○				73	権現山古墳群						
24	原口遺跡	○			○			74	観音前遺跡	○		○	○		
25	堂ノ上遺跡	○		○	○			75	要害山古墳群						
26	五切遺跡	○			○			76	弥陀ノ台遺跡		○		○		
27	小川焼窯跡					○		77	笠松遺跡	○	○	○			
28	水走り遺跡	○						78	茶屋塚古墳群						
29	小川城跡					○		79	笠松館跡	○	○	○	○		
30	古城ノ内遺跡	○						80	高野遺跡	○					
31	香取下遺跡	○	○	○	○	○	○	81	根田上遺跡	○	○				
32	香取台稻荷古墳			○				82	池下遺跡	○	○	○			
33	香取遺跡	○	○	○	○	○	○	83	下坪遺跡	○	○	○	○		
34	折戸古墳			○				84	蟹船遺跡	○	○	○	○		
35	辻微高地遺跡	○	○	○	○	○	○	85	山ノ内古墳群						
36	東前遺跡	○	○	○	○	○		86	七人塚古墳群						
37	飯塚跡				○	○		87	君ヶ塚古墳群						
38	原山館跡	○	○	○	○	○	○	88	富士館跡				○		
39	中台北遺跡	○		○	○			89	平古墳群				○		
40	田木谷遺跡	○	○	○	○	○		90	十一久保經塚群						
41	福脣遺跡	○		○	○			91	高原城跡				○		
42	西平西根古墳	○	○	○	○			92	一字一石經塚				○		
43	八幡脇貝塚	○		○	○			93	十三遺跡	○					
44	西平西根古墳			○				94	十三塚		○				
45	岩屋古墳			○				95	三箇弁天經塚群				○		
46	岩屋遺跡	○	○	○	○	○	○	96	熊野権現古墳						
47	桜久保遺跡	○	○	○	○	○	○	97	壱岐塚古墳群						
48	東前古墳群				○			98	東山遺跡	○	○	○	○		
49	豊下古墳			○				99	鶴田城跡				○		
50	宮後古墳群			○											

佐竹氏は南進する江戸氏を援助し、天正 11（1583）年、小田氏を従属させた。一方、江戸氏は天正 13（1585）年、対大株氏の前線に堅倉砦（小美玉市）を築いて、その後小川城（小美玉市）へと兵を進めた。南下する江戸氏に対し、大株氏は田余砦や弓削砦を築いて激戦を繰り返すが、天正 18（1590）年、水戸の江戸氏を滅ぼした佐竹氏によって、田余砦、府中が攻められ、滅亡した。

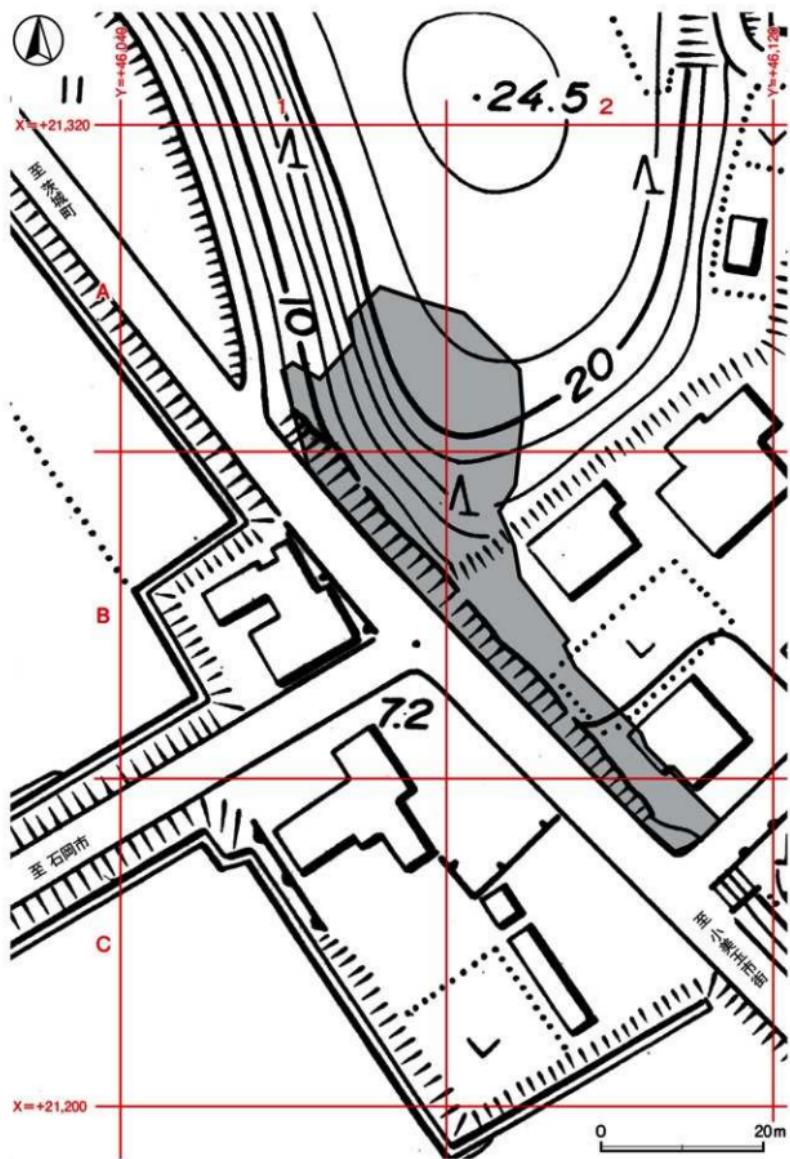
園部川下流域には多くの城館跡がみられ、上記した構図をうかがい知ることができる。大株氏の支城として、まず挙げられるのは、富士峰館跡・館山館跡・愛宕館跡・城之内館跡・要害館跡・田余館跡・飯塚館跡（37）、原山館跡（38）の玉里八館である。田余館は田余砦（取手山城）に比定され、江戸氏・佐竹氏進行のおり、激戦となった場所である。また、大株氏家臣の居館とされる殿塙館跡（68）や笠松館跡（79）、大株氏一族の築城とされる竹原城跡、内耳土器が出土した弓削砦跡などがある。高原城跡（91）においては南北朝期に廢城となつたとされるが、大株氏の五輪塔が所在する風林寺、永福寺などの寺院や堀ノ内、木戸橋、関町の地名などから、富士館跡（88）と合わせて戦国期の中郷城¹⁾とする説もある。これらの城館跡は、園部川や沢目川の右岸に分布している。一方小田氏の支城は、長方形の主郭を持つ羽鳥館跡や鶴田城跡²⁾（99）、小田氏家臣園部氏の居城である小川城跡（29）がある。また、宮田館跡や中根城跡（21）は園部氏の支城であり、園部川・沢目川右岸の大株氏の支城と対峙して分布している。こうした分布状況からすると下田城跡（13）も園部氏の支城と推定され、また巴川右岸の馬場坪遺跡に隣接する立開城跡が園部氏の配下であったとする報告³⁾と照合すれば、園部氏の城館ネットワークは小川城を軸の間に園部川と鎌田川や巴川に挟まれた台地上に展開していたものと思われる。そして、このネットワークは鶴田城や羽鳥城などを経由して、小田城へと繋がっていたものと思われる。

このように園部氏やその配下の小領主達は、周辺勢力の情勢に対して敏感に対応し、勢力間を渡り合うことで所領を死守してきたことがうかがわれる。しかし後北条氏滅亡後、豊臣氏から佐竹氏に給付された知行安堵の朱印状には、実質的に知行していない大株氏や江戸氏の所領も含まれていたとされている⁴⁾。佐竹氏は豊臣政権下の大名として、朱印状に則した仕置きを敢行し、大株氏や江戸氏、その配下である園部氏は滅ぼされたのである。

註

- 1) 小川町史編さん委員会編『小川町史』下巻 小川町 1988 年 3 月
- 2) 横山芳春「茨城県における更新統下越層群の層序と堆積史」『早稲田大学リポジトリ』早稲田大学 2005 年 3 月
- 3) 小玉秀成・本田信之『駒山遺跡発掘調査報告書－旧石器・縄文・弥生時代編－玉里村総合文化センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』玉里村立資料館 1999 年 3 月
- 4) a 本田信之『香取下道跡』『玉里村立資料館 Vol.6』玉里村立資料館 2001 年 3 月
b 註 1) に同じ
- 5) 小林三郎『玉里村椎現山古墳発掘調査報告書』玉里村教育委員会 2000 年 3 月
- 6) 宮内良隆・石田幹治『地蔵塚古墳』小川町教育委員会 1981 年 3 月
- 7) 赤井博之『竹原小学校遺跡出土の古墳時代前期の埴輪と土師器』『小美玉市史料館報 第 4 号』小美玉市立資料館 2010 年 3 月
- 8) 註 5) に同じ
- 9) 註 1) に同じ
- 10) 大株氏・小田氏・江戸氏・佐竹氏などの動向を記すにあたっては、下記の文献を参考とした。
a 渕谷義彦監修『図説 那珂・久慈・多賀の歴史 茨城県の歴史シリーズ』郷土史出版 2004 年 11 月

- b 佐久間好雄監修『図説 土浦・石岡・つくばの歴史 桃城県の歴史シリーズ』 那土史出版 2004年11月
- 11) 中郷城の所在においては諸説あり。この他にも竹原城跡を比定する説や竹原中郷地内の高原城跡以外の場所に求める説などがある。中郷地区においては、上馬場から竹原城跡に向かうルート上にあり、また中郷から^{佐久間好雄著}三箇井天神群(95)や中世においてランドマークとなる十三塚(94)、熊野推現古墳(96)を経由して三箇井へ至るルートもみられ、交通の要所であったことがうかがわれる。
- 12) 美野里町史編さん委員会編『美野里町史』(上) 美野里町 1989年3月
戦国期の鶴田長門守によって築城されたとされるが、詳細は不明である。当該地においては、小田氏の最盛期の勢力下にあった時期や小田氏一族の宍戸氏における所領下にあった時期もあることから、小田氏系の城郭と思われる。
- 13) 市村俊英「馬場坪遺跡 一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第273集 2007年3月
- 14) 註1) と同じ



第2図 宮田館跡調査区設定図（小川都市計画図 2,500 分の 1 より作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

宮田館跡は、小美玉市の中央部に位置し、園部川左岸の標高約22mの舌状台地に立地している。調査区は舌状に張り出した台地の先端部及び園部川に面した急傾斜となる尾根の部分で、調査面積は934m²である。調査前の現況は山林である。

調査の結果、2区画の曲輪跡と掘立柱建物跡1棟、土塁跡2条、堀跡1条、土坑1基を確認した。時期はいずれも戦国時代である。なお調査区の南西半分は第1号トレレンチなどを設定し、調査をおこなったが、削平されており、城郭に伴う遺構などは確認されなかった。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に2箱出土している。主な遺物は、縄文土器片、弥生土器(壺)、土師器片、土師質土器(皿・鉢・鍋)、陶磁器、土製品(土錘)、石器(剥片)、石製品(火打ち石)、金属製品(鉄砲玉)などである。なお、遺構内外から自然石108点(9.8kg)が出土した。この内、拳大のものは53点(4.8kg)あり、飛碟としての可能性も否定できないことから、記載しておくこととした。

第2節 基本層序

調査区中央部の台地上の平坦面(A2fl区)に設定した。

第1層は黒褐色の腐植土である。粘性、縮まりともに弱く、層厚4~18cmである。

第2層は褐色の自然堆積土である。ローム小ブロックを主体とし、焼土粒子、炭化粒子を少量含む。粘性、縮まりともに普通で、層厚は4~22cmである。

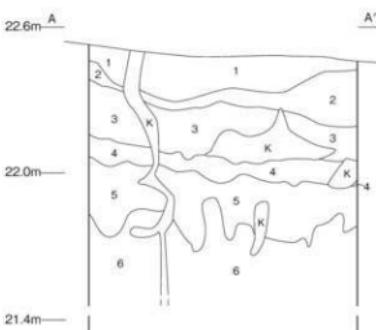
第3層は褐色の自然堆積土である。ローム小・中ブロックを主体とし、炭化粒子を微量含む。粘性は普通、縮まりはやや強く、層厚は14~22cmである。

第4層はにぶい黄褐色の整地層である。ローム小~大ブロックを主体とし、粘土粒子を少量含む。粘性は弱く、縮まりは強く、層厚は8~12cmである。

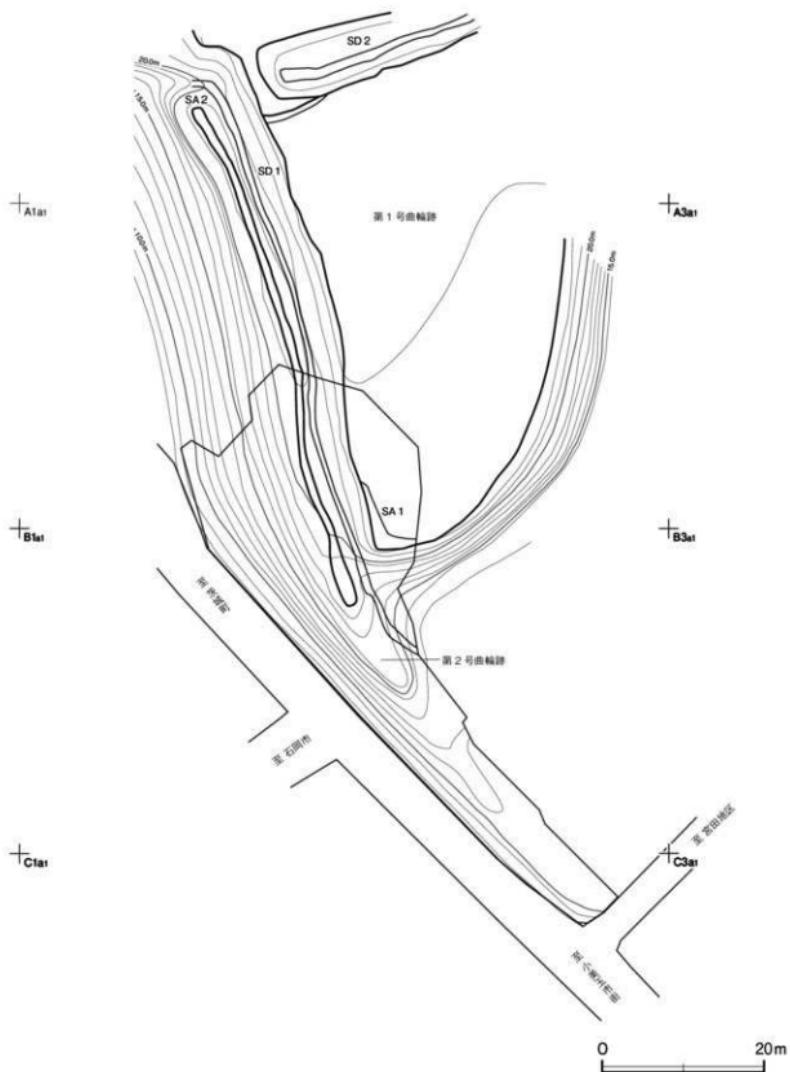
第5層は褐色のハードローム層である。粘性は普通で、縮まりはやや強く、層厚は10~32cmである。本層と第6層との層間にはクラックが顕著にみられ、あるいは漸移層に対応する可能性も考えられる。

第6層はにぶい黄褐色のハードローム層である。粘性は普通で、縮まりは強い。下部まで掘り抜いていないため層厚は不明であるが、土塁跡(SA 1)及び堀跡(SD 1)の遺構調査において、第6層以下の層位を堀跡壁面で確認している。第3章第3節(第7図)を参照いただきたい。

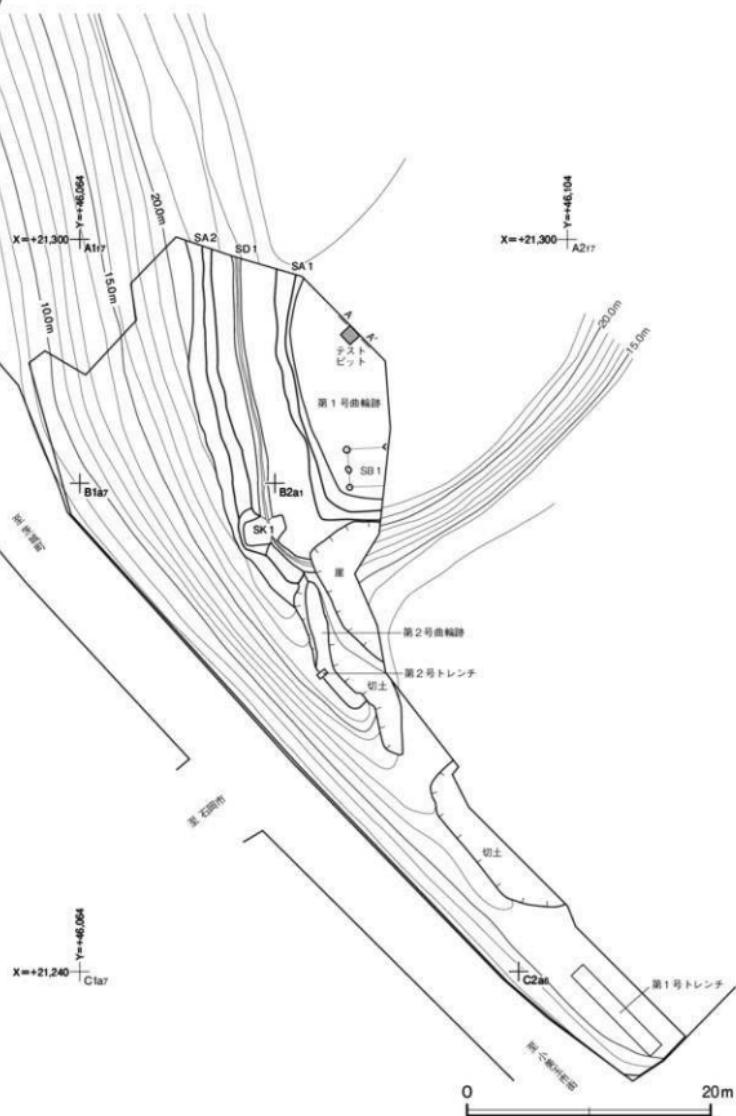
遺構は、第4層上面で確認されている。



第3図 基本事層図



第4図 宮田館跡現況測量図



第5図 宮田館跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 戦国時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、2区画の曲輪跡と掘立柱建物跡1棟、土塁跡2条、堀跡1条、土坑1基を確認した。第1号曲輪においては、第1号掘立柱建物と第1号土塁が付帯施設として伴っている。また、第1号堀の掘削土は第1・2号土塁の構築土に利用されている。

宮田館跡の調査においては、調査区北側に隣接する土地を耕土置き場として借地した。この地点においては、当館跡に伴う良好な遺構が認められたことから、土地所有者及び委託者の了解を得て現況測量(第4図)をおこなった。まず、第1号曲輪跡は借地全域に広がりをみせ、その北側には東西軸の堀跡(SD 2)が認められた。さらに、堀跡(SD 2)北側に隣接する屋敷地にも、外縁部に沿った数か所で、土塁跡と思われる土盛りが残存しており、曲輪跡と思われる。

以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 曲輪跡

第1号曲輪跡(第6図)

位置 調査区北東部のA2b1～B2a3区、標高22mほどの台地上に位置している。

規模と形状 現況の規模は、長軸55m、短軸30mで舌状を呈し、長軸方向はN-4°-Wである。平場は南へ緩やかに傾斜しており、外縁にみられる土塁跡は、現地形からは明確にならなかった。北西端部には帯状の高まりが北側の曲輪跡と繋がって残存しており、土橋跡と思われる。

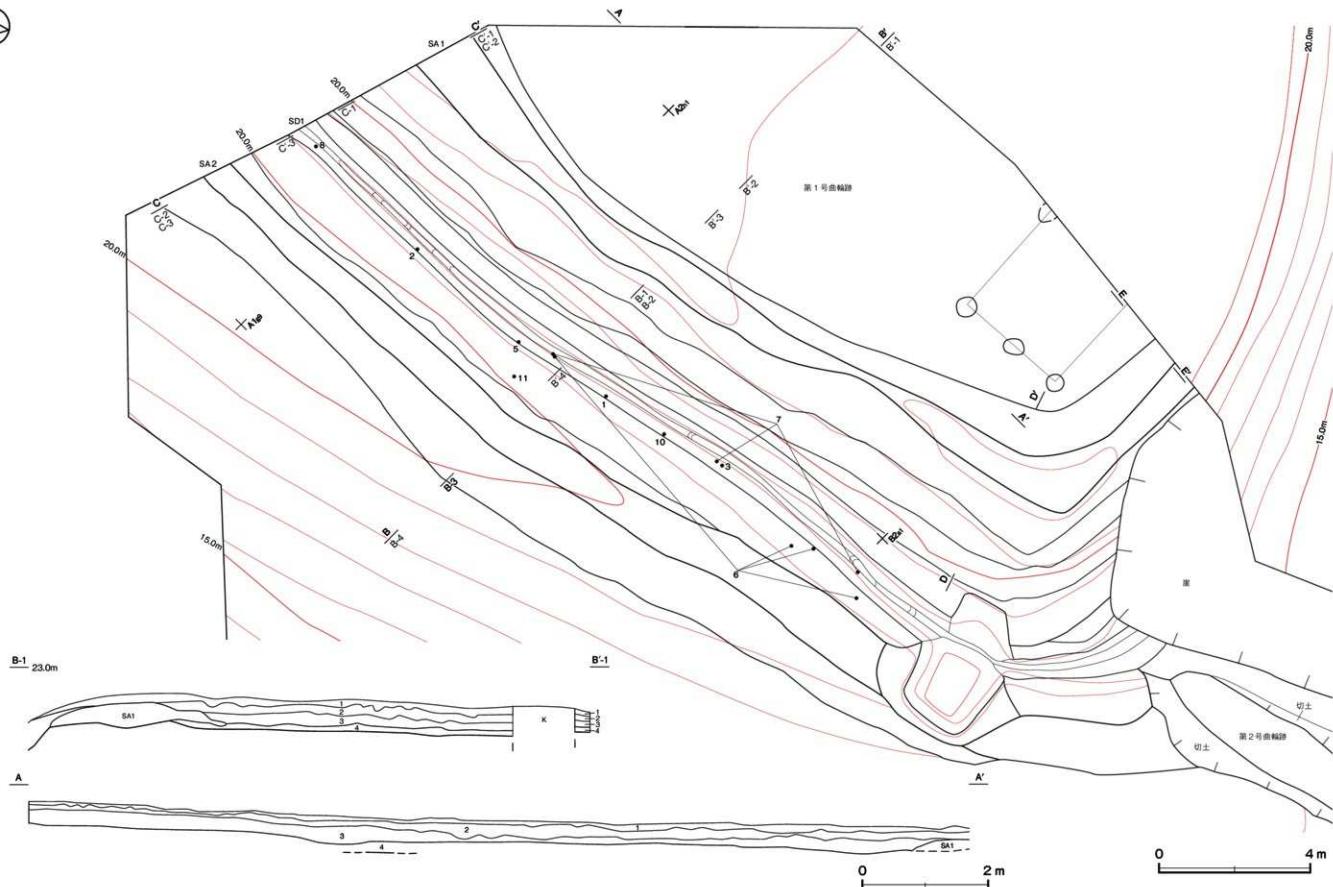
第1号曲輪跡における今回の発掘調査区域は、南西端部にある。範囲は長軸19m、短軸9mで舌状形を呈した台地上の先端部にある。外部とは第1号堀によって遮断され、西から南縁辺にかけて確認された第1号土塁によって区画されている。生活面は緩やかに南傾しているが、南端部においては、ほぼ平坦である。覆土 3層に分層できる。第1層は腐植土を主体とする表土である。第2・3層は自然堆積層で、当館の堀跡後、堆積した層位である。第4層はロームブロックを主体とした整地層で硬化している。宮田館の構築時の層位であり、本層上面が生活面に相当する。

土層解説

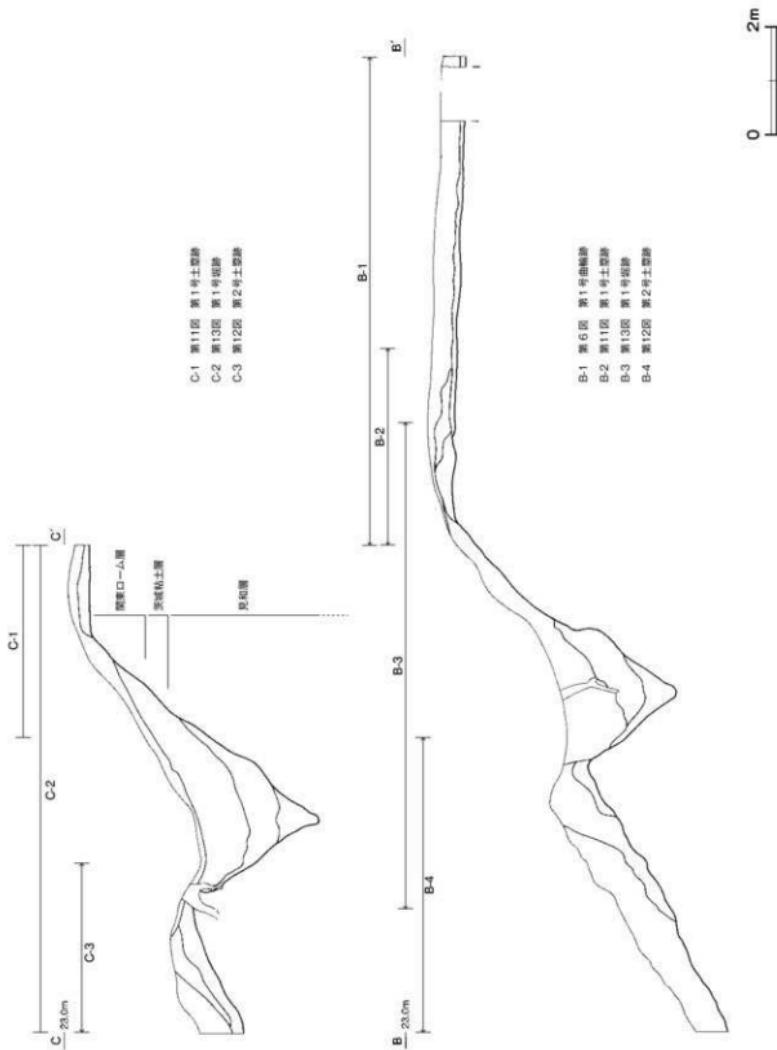
1 黒褐色	腐植土主体、ローム小ブロック微量	3 黒褐色	ローム小・中ブロック主体、炭化粒子微量
2 褐色	ローム小ブロック主体、焼土粒子・炭化粒子少量	4 にふく褐色	ローム小・大ブロック主体、粘土粒子少量

遺物出土状況 第4層および直上面からの出土遺物はなかった。第1～3層中に含まれる遺物は、繩文土器片17点(深鉢)、弥生土器片8点(壺)、土師器片24点(甕)、土師質土器片23点(皿11・擂鉢1・鍋11)、陶器片5点、磁器片3点、剥片1点、瓦片33点などであり、陶磁器や瓦は近世以降の所産である。時期の統一性がみられないことから、混入したものと思われる。中世遺物として、実測可能なものは擂鉢のみであったが、表土中の出土であったことから、本節末に掲載した。

所見 本曲輪は台地の先端部、舌状地形を利用して構築されている。層位の重複からは第1号掘立柱建物や第1号土塁が本曲輪より新しい構造物であるが、堀跡における手順と判断される。このことから、第1号掘立柱建物や第1号土塁は本曲輪の付帯施設と考えられる。出土遺物が伴わないことから、時期は明確でないが、第1号堀跡の出土遺物から16世紀前葉には本曲輪が構築されていた可能性が高いと思われる。また本曲輪跡からは園部川流域および、大株氏の支城である竹原城跡などが一望できる。



第6図 第1号曲輪跡、第1・2号土塁跡、第1号堀跡実測図



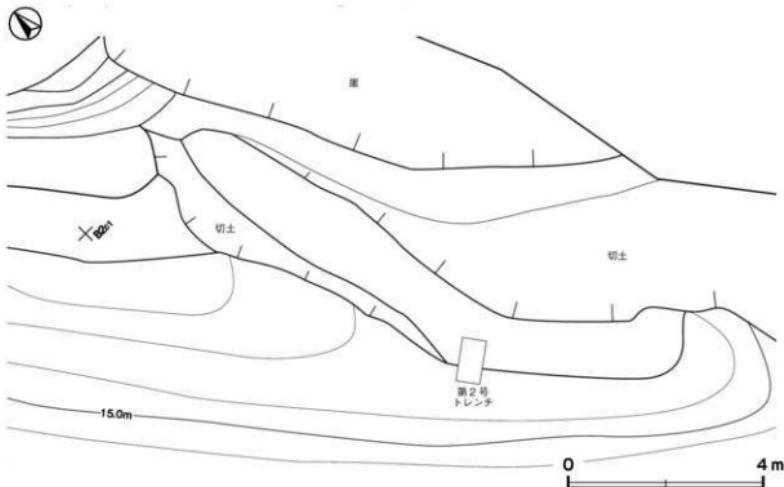
第7図 第1号曲輪跡、第1・2号土壙跡、第1号堀跡実測略図

第2号曲輪跡（第8図）

位置 調査区中央部のB2c1～B2e2区、標高16mほどの傾斜面に位置している。

規模と形状 東部が大きく切り崩されているため、形状は不明である。残存規模は長軸8m、短軸2mで、長軸方向はN-40°-Wである。北西外縁部に土壘跡と思われる高まりがみられたことから、第2号トレンチを設定し調査をおこなった。結果、地山が露呈しており、生活面は後世の土地利用によって、すでに削平されていることが判明した。本曲輪跡の外側は急傾斜の山肌である。

所見 本曲輪に伴う遺構は確認されなかったことから、構築時期は不明である。第2号土壘や第1号堀は、自然地形を利用した第1号曲輪に沿って位置していることから、本曲輪においても自然地形に沿って、第2号土壘の南側に位置する帯曲輪であったと考えられる。また石岡市方面や殿坂館跡・笠松館跡から延びる交通路のほぼ正面に位置している。



第8図 第2号曲輪跡実測図

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第9・10図）

位置 調査区北東部のA2j2～B2a3区、標高22mほどの台地上に位置している。

重複関係 第1号曲輪の整地面を掘り込んでいるが、同曲輪の付帯施設と考えられる。

規模と構造 調査区域外へ延びる建物跡であることから、桁行2間、梁行1間の閣柱建物跡と推定され、桁行方向はN-8°-Wの南北棟と考えられる。規模は桁行3.00m、梁行3.30mで、面積は9.90m²と推定される。柱間寸法は桁行が北妻から1.50m(5尺)、1.50m(5尺)で、梁行が西平から3.30m(1間5尺)に配置されており、柱筋はほぼ揃っている。当該期によくみられる妻柱を持たない建物と考えられる。桁行と梁行との柱間寸法から、梁間は桁間の概ね2倍の間隔であるが、梁間の方が多少長くなっている。また確認され

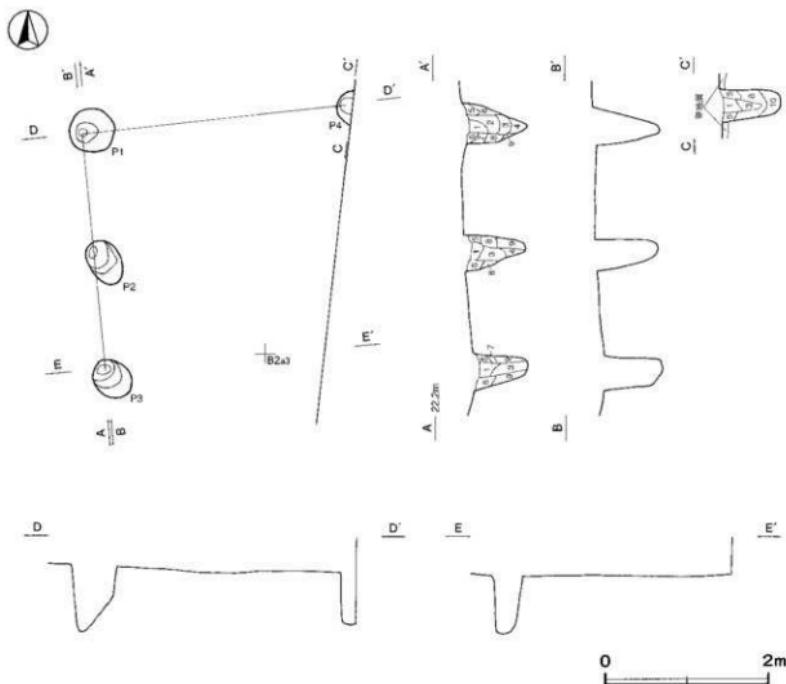
た西側桁行と北側梁行との柱穴列の交差角はほぼ 90 度であり、小規模ながら規格性のある建物であったものと考えられる。

柱穴 4か所を確認した。平面形は円形または梢円形で、長径 53 ~ 59cm、短径 42 ~ 55cm である。深さは 68 ~ 82cm と比較的均一で、底面は茨城粘土層の上層位へ達している。掘方の断面は U 字形であるが、P 1・P 3においては柱抜き取りの行為によって、掘方形状が壊されている。

第 1 ~ 4 層は柱抜き取り後の埋土、第 5 ~ 10 層は掘方への埋土である。第 5 ~ 10 層においては、堆積の仕方が疎らであることや覆土にみられる含有物に統一性がみられないことから、不規則的に掘方を埋めたものと考えられる。

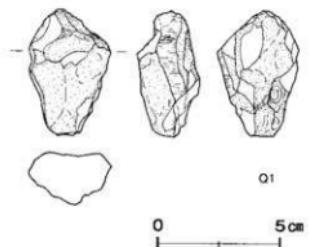
土層解説（各柱穴共通）

1	暗	褐色	ローム小~大ブロック・粘土粒子微量	6	にじみ	黄褐色	ローム小~大ブロック多量、粘土小・中ブロック中量
2	黒	褐色	ローム小ブロック少量、粘土小・中ブロック微量	7	褐	褐色	ローム小~大ブロック中量、粘土小ブロック微量
3	暗	褐色	ローム小ブロック少量、粘土小ブロック・粒子微量	8	暗	褐色	ローム小~大ブロック多量
4	褐	褐色	ローム小・中ブロック少量、粘土粒子微量	9	褐	褐色	ローム小~大ブロック多量、粘土小ブロック微量
5	褐	褐色	ローム小~大ブロック多量、粘土小・中ブロック微量	10	にじみ	黄褐色	ローム小~大ブロック多量



第 9 図 第 1 号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 石製品 1 点（火打ち石）が出土している。Q 1 は P 2 の掘方の埋土から出土している。製品



第10図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第10図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	火打石	51	34	26	34.95	瑪瑙	側面の2面に縱方向の鋸き痕 表面の窪みに加工	P 2	PL8

(3) 土壙跡

第1号土壙跡（第6・11図）

位置 調査区北部のA1f0～B2a3区、標高22mほどの台地上に位置している。

規模と構造 北端、東端ともに調査区域外へ延びているため、長さは23mしか確認できなかった。A1f0区から南方向（N-12°-W）へ緩やかに弯曲して延び、B2a1区からはほぼ直角（N-94°-E）に東へ折れ曲がり、直線的にB2a3区へ達している。規模は、上幅0.20～1.60m、下幅0.80～3.80mで、地山からの残存高は0.30～0.80mである。残存状態が良好な部分から、断面形はほぼ台形と推定される。原形をとどめている部分はほとんどないと思われ、最終的には破壊されている。また、上幅面には欄列などの痕跡は確認されず、付帯施設の痕跡は確認されなかつた。

覆土 10層に分層できる。第1～3層は流出土、第4～10層は土壙の構築土層である。構築土層の下層位はロームブロックが主体となっており、上層位になるほど粘土（茨城粘土層）ブロックや砂質粘土（見和層）ブロックの含有が増加する特徴がみられる。

土層解説

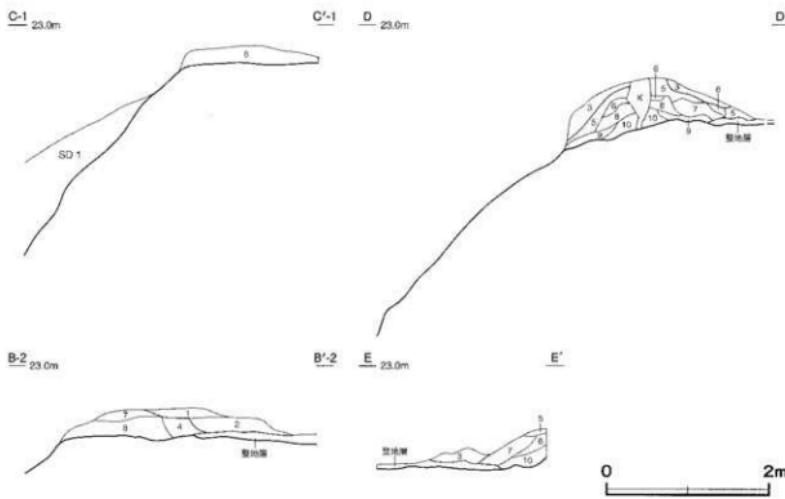
1 暗褐色	ローム小・中ブロック中量。砂質粘土小ブロック微量	6 黄褐色	ローム小～大ブロック主体。砂質粘土中ブロック少量
2 暗褐色	ローム小～大ブロック中量。砂質粘土小ブロック微量	7 いわく唐色	ローム小ブロック・砂質粘土小ブロック中量
3 明黄褐色	ローム粒子多量。粘土小ブロック中量	8 暗褐色	粘土小・中ブロック・ローム小ブロック中量。砂質粘土小・中ブロック少量
4 暗褐色	ローム小・中ブロック中量。砂質粘土小ブロック少量	9 黄褐色	ローム小・中ブロック多量。粘土小・中ブロック少量
5 明褐色	ローム小・中ブロック中量。砂質粘土中ブロック少量	10 暗褐色	ローム小・中ブロック主体。粘土小ブロック少量

遺物出土状況 土壙の構築土層から出土遺物は確認されなかつたが、流出土中から土師質土器片3点（皿1・鍋2）が出土している。いずれも細片で図示はできない。また、混入した繩文土器片1点（深鉢）、弥生土器片2点（壺）、土師器片9点（不明）なども出土している。

所見 第1号曲輪に伴う土壙であることから、時期は16世紀前葉には構築されていたものと考えられる。

見和層上層域以上の自然堆積層が含有物として混入している土層の堆積状況から、第1号堀の掘削土を盛土

して構築されている。このことから第2号土壘の構築前に本土壘が構築されていることが判明し、構築土層においては基本層序の下層位に位置するものが、構築土層の上層位に含有物として含まれている。



第11図 第1号土壘跡実測図

第2号土壘跡（第6・12図）

位置 調査区北部から中央部のA1f9～B2c1区、標高19～21mほどの傾斜面に位置している。

重複関係 第1号土坑に掘り込まれている。

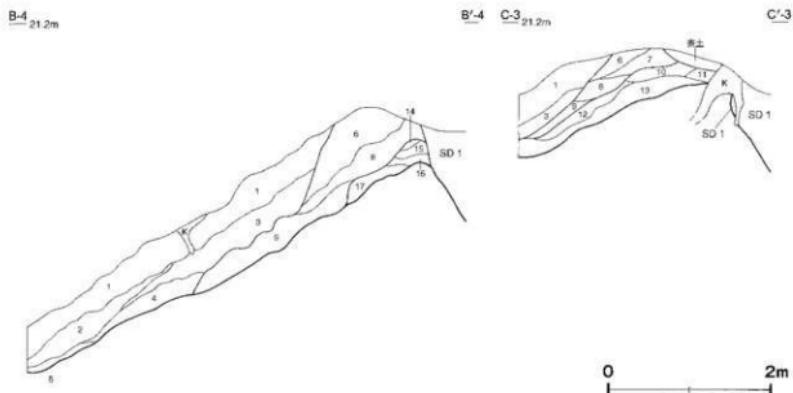
規模と構造 北端は調査区域外へ延び、東端は切り崩されているため、長さは29mしか確認できなかった。A1f9区から南方向（N-6°-E）へ緩やかに弯曲して延び、B1b0区からは南東方向（N-133°-E）に緩やかに屈折してB2b1区へ達している。上幅0.60～1.30m、下幅0.80～3.10m、地山からの高さは0.60～1.50mである。搅乱部分を省けば盛土の遺存状態は良好である。断面形状は台形であるが、法面の傾斜が異なる部分がみられる。トレンチ調査の結果、少なくとも2度の構築が確認されたが、初現の土壘においては土砂の流出によって形状は不明である。また、上幅面には柵列などの痕跡は確認されず、付帯施設は伴わなかったものと考えられる。

覆土 17層に分層できる。第1～5層は堀浚いによる排出土、第6～9層は最終段階の構築土層、第10～17層は初現の構築土層と判断した。これら層位の含有物は、多くが見和層上層域以下に堆積した砂質粘土であるが、第16・17層においては見和層の上層にあたる茨城粘土層の小ブロックが含まれている。時期が異なる土壘の構築土層が含まれている可能性もあるが、判然としない。

第9層は初現の構築土層の流出や堀浚いによって形成された層と思われるが、その層を基盤として土壘が構築されている。土壘の防御効果が低減したことから再構築したものと考えられる。

土層解説

1	にい・黄褐色	砂質粘土中量。ローム粒子少量。粘土中ブロック微量	9	褐	色	ローム小ブロック中量。砂質粘土小・中ブロック少量
2	にい・黄褐色	砂質粘土小・中ブロック中量。粘土小ブロック少量。ローム粒子微量	10	褐	色	ローム小ブロック中量。砂質粘土中ブロック微量
3	にい・黄褐色	砂質粘土小ブロック中量。粘土小ブロック少量	11	褐	色	ローム粒子多量。砂質粘土小ブロック中量
4	黄褐色	粘土小ブロック中量。砂質粘土中・大ブロック少量	12	にい・黄褐色	ローム小ブロック中量。砂質粘土小ブロック少量	
5	褐	砂質粘土小ブロック中量。ローム小ブロック・粘土小ブロック少量	13	褐	色	ローム粒子多量。砂質粘土小ブロック少量
6	にい・黄褐色	砂質粘土小・中ブロック主体。ローム粒子微量	14	にい・黄褐色	ローム小ブロック・砂質粘土小ブロック中量	
7	黄褐色	砂質粘土小・中ブロック中量。ローム粒子微量	15	にい・黄褐色	砂質粘土小ブロック中量。ローム粒子少量	
8	褐	粘土中ブロック中量。ローム粒子・砂質粘土小ブロック少量	16	にい・黄褐色	ローム小ブロック・砂質粘土粒子多量。粘土小ブロック少量	
			17	にい・黄褐色	砂質粘土粒子多量。粘土小ブロック少量	



第12図 第2号土壙跡実測図

遺物出土状況 第6層の土壙の構築土層から土師質土器片4点（皿2・鍋2）が出土したが、細片であることから、土壙の構築時期の決定にはいたらなかった。また、混入した土師器片2点（壺・内面黒色処理）も出土している。

所見 構築土層の含有物は、砂質粘土や砂粒子が混入している。これらの含有物は見和層上層域以下の各自然堆積層にみられるものであることから、第1号堀の掘削土を使用して第1号土壙を構築した後、本土壙が構築されたことを示している。このことから時期は、第1号堀跡の出土遺物が埋没する以前の段階であり、16世紀前葉には構築されていたものと考えられる。

なお、初現の構築土層において、第10～13層と第14～17層では層位の発色や含有物が異なっている。特に、第16・17層には茨城粘土層の小ブロックが含まれており、見和層のみを含有する他の構築土層とは異なるため、若干の時期差が生じる可能性がある。

(4) 堀跡

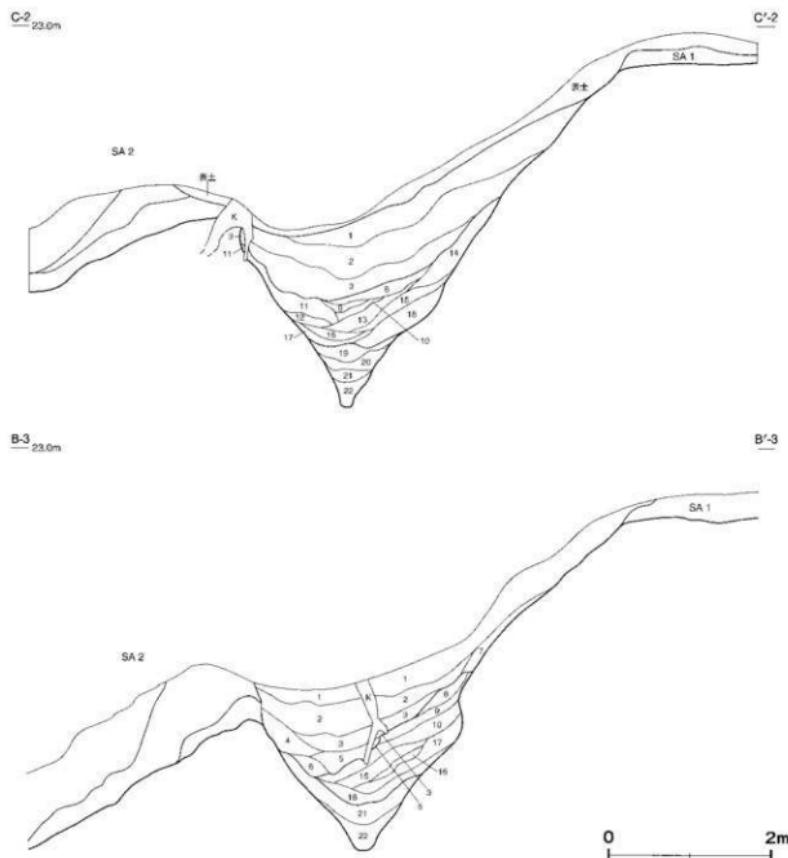
第1号堀跡（第6・13～16回）

位置 調査区北部から中央部のA1f0～B2b1区、標高21mほどの傾斜面に位置している。

重複関係 第1号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 北端は調査区域外へ伸び、東端は切り崩されているため、長さは27mしか確認できなかった。A1f0区から南方向(N-7°-E)へ緩やかに彎曲して伸び、B2b2区付近からは東方向(N-126°-E)へ折れ曲がっている。上幅4.50~5.20m、下幅0.20~0.30m、底面から土壠の基部までの高さは第1号土壠で4.00~4.70m、第2号土壠で1.60~2.40mである。断面形は概してV字形を呈しているが、第1号曲輪側の壁面を垂直に切り落とした部分(切岸)もみられる。堀は見和層中層域まで掘り下げており、堀底には溝状の窪みが確認され、緩やかな凹凸がみられる。

覆土 22層に分層できる。第1~7層は自然堆積層、第8~18層は第1号土壠跡の構築土層に似ていることから、土壠を破壊して埋め戻している。第19~21層は砂質粘土(見和層)を含有物として多く含む堆積層であることから、壁面を垂直に切り落とした際の埋め戻しと判断した。第22層は自然堆積層で、堀浚いされ



第13図 第1号堀跡実測図

ないまま放置されている。

なお、出土遺物の取り上げに際しては、第1～7層を上層、第8～18層を中層、第19層以下を下層とした。

土層解説

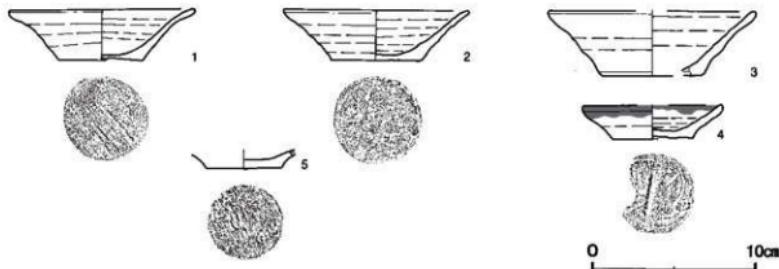
1 黄褐色	ローム中ブロック少量	13 灰褐色	砂質粘土小ブロック多量、ローム小ブロック少量
2 明褐色	ローム小ブロック少量	14 青褐色	ローム小・中ブロック中量、砂質粘土中ブロック、炭化物少量
3 灰黄褐色	粘土粒子・砂粒子中量、ローム小ブロック少量	15 褐色	ローム小・大ブロック中量、砂質粘土大ブロック、炭化物少量
4 にごり黄褐色	砂粒子中量、ローム小ブロック少量	16 暗褐色	砂質粘土小ブロック中量、ローム小・中ブロック少量
5 褐灰色	砂質粘土小ブロック・砂粒子中量、ローム小ブロック少量	17 青褐色	ローム小・中ブロック中量、砂質粘土小ブロック少量
6 明褐色	砂質粘土小ブロック中量、ローム小ブロック少量	18 明黄色	砂質粘土中ブロック・砂粒子中量、ローム小ブロック少量
7 明黄褐色	砂質粘土中・大ブロック・砂粒子中量、ローム小ブロック少量	19 黄褐色	砂質粘土中ブロック中量、ローム中ブロック少量
8 灰褐色	砂質粘土小ブロック中量、ローム小・中ブロック少量	20 灰黄色	砂質粘土小・中ブロック中量、ローム粒子少量、炭化物少量
9 褐色	ローム小・中ブロック・砂質粘土小ブロック少量	21 浅黄色	砂質粘土大ブロック多量、ローム中ブロック少量
10 暗褐色	ローム小・中ブロック・砂質粘土中ブロック中量、炭化物少量	22 青灰黄色	砂質粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量
11 黄褐色	ローム中・大ブロック中量、砂質粘土小ブロック少量		
12 暗褐色	ローム小・中ブロック中量、砂質粘土中ブロック少量		

遺物出土状況 土師質土器片53点（皿5、鉢1、鍋47）、金属製品1点（鉄砲玉）が出土した。また、混入した繩文土器片36点（深鉢）、弥生土器片11点（壺）、土師器片23点（壺2、甕21）、土製品1点（土錘）、石器2点（剥片）も出土している。4・6・8・14・M1は上層下層域から、3・5・7・12・13は中層から、1・2・9は下層から出土している。

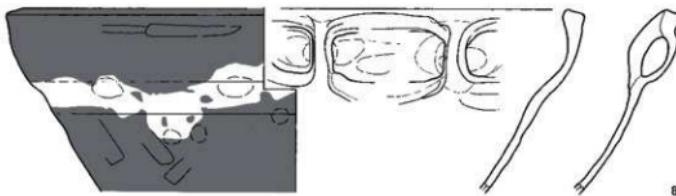
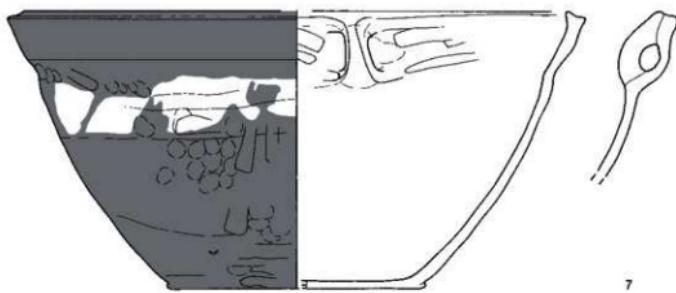
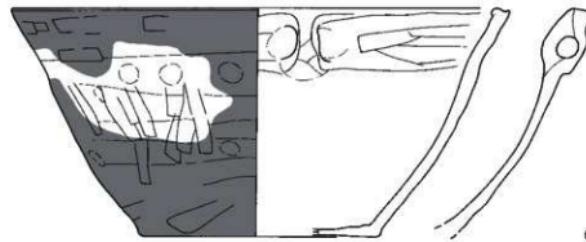
出土遺物の数量は少ない。その中でも、下層や上層・中層域の出土量は少なく、中層から上層下層域にかけて集中している。とりわけ土師質土器鍋（内耳鍋）の出土量は多く、6・7のように堀底一帯に散乱した状況も見受けられ、第1号曲輪から投げ捨てられている。

なお、細片で図示はできなかったが、中層から出土した土師質土器の鉢類は擂鉢で8条1単位の擦り目がみられる。

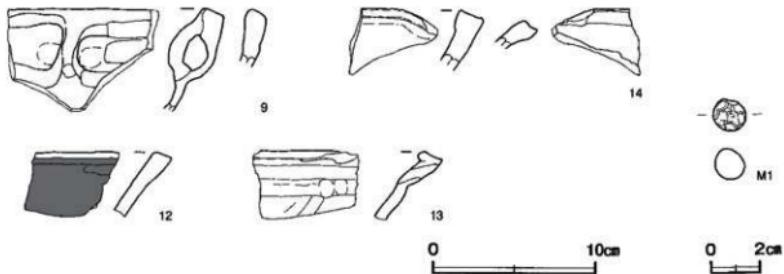
所見 堀は、薬研堀から切岸を用いた平底もしくは丸底の堀へと改修されている。時期は、出土遺物から16世紀と判断されるが、土師質土器皿は、下層出土の1・2と中層出土の5では、色調・胎土・形状などで様相が異なっている。また、土師質土器鍋（内耳鍋）においても、下層から上層下層域出土の6・7・9が内耳部の孔が円形であるのに対し、上層下層域出土の8は梢円形の孔であり、円形の孔から梢円形の孔へ緩やかに変遷している。このことから、薬研堀の段階は16世紀前葉以前、改修は16世紀前葉から後葉、廢絶は後葉から末葉と考えられる。



第14図 第1号堀跡出土遺物実測図(1)



第15図 第1号堀跡出土遺物実測図(2)



第16図 第1号堀跡出土遺物実測図（3）

第1号堀跡出土遺物観察表（第14～16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	11.2	3.2	5.2	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り後板目状圧痕	下層	100% PL6
2	土師質土器	皿	11.4	3.1	5.5	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	下層	95% PL6
3	土師質土器	皿	[126]	4.0	[6.0]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	中層	20%
4	土師質土器	皿	[86]	2.1	5.0	胎土・赤色粒子	[に]赤い程 鐵斑	良好	ロクロナデ 底部回転糸切り 口縁部油煙付着	上層下層域	30% PL6
5	土師質土器	皿	-	(1.2)	4.6	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	中層	40%
6	土師質土器	内耳皿	30.0	14.2	[14.4]	長石・石英・雲母	[に]赤い程	普通	輪積に沿って捺壓痕 圓状工具によるナデの後ロクロナデ 陶片着 底部板目状圧痕	上層下層域	60% PL6
7	土師質土器	内耳皿	[336]	17.1	[15.4]	長石・石英・雲母	程	普通	輪積に沿って捺壓痕 圓状工具によるナデの後ロクロナデ 陶片着 底部板目状圧痕	中層	40% PL6
8	土師質土器	内耳皿	[336]	[11.3]	-	長石・石英・雲母	[に]赤い程	普通	輪積に沿って捺壓痕 圓状工具によるナデの後ロクロナデ 陶片着 底部板目状圧痕	上層下層域	15% PL6
9	土師質土器	内耳皿	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	内耳内外に捺壓痕 黑狀工具によるナデの後ロクロナデ 陶片着	下層	5% PL6
10	土師質土器	内耳皿	-	(3.4)	[5.2]	長石・石英・雲母	[に]赤い程	普通	輪積に沿って捺壓痕 体部下端横ナデ後ロクロナデ 陶片着 底部板目状圧痕	覆土中	10%
11	土師質土器	内耳皿	-	(3.8)	[7.2]	長石・石英・雲母	純	普通	輪積に沿って捺壓痕 圓状工具によるナデの後ロクロナデ	覆土中	5%
12	土師質土器	内耳皿	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	[に]赤い程	普通	ロクロナデ 陶片着	中層	5%
13	土師質土器	鉢類	-	(4.2)	-	胎土・赤色粒子 鐵斑	程	良好	口縁部内面に突出部 口縁部下部にくびれ 指頭痕 圓状工具によるナデの後ロクロナデ	上層下層域	5%
14	土師質土器	片口	-	(4.1)	-	胎土・赤色粒子 鐵斑	[に]赤い程 鐵斑	良好	ロクロナデ 内面に後 口縁部外・内面に後 ロクロナデ 厚手の注口	中層	5% PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鉢底瓦	1.28	1.32	-	1694	鉢	鍛造品 3匁半の大鉢瓦弾	上層下層域	PL6

(5) 土坑

第1号土坑（第17図）

位置 調査区中央部のB1a0～B2b1区、標高19mほどの傾斜面に位置している。

重複関係 第2号土壘と第1号堀を掘り込んでいる。

規模と構造 長軸3.90m、短軸3.80mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-21°-Wである。深さは2.96mで、断面形状はV字形である。底面は見和層下層域まで掘り下げており、長径軸84cm、短径軸54cmの梢円形を呈するピット状の掘り込みがみられる。

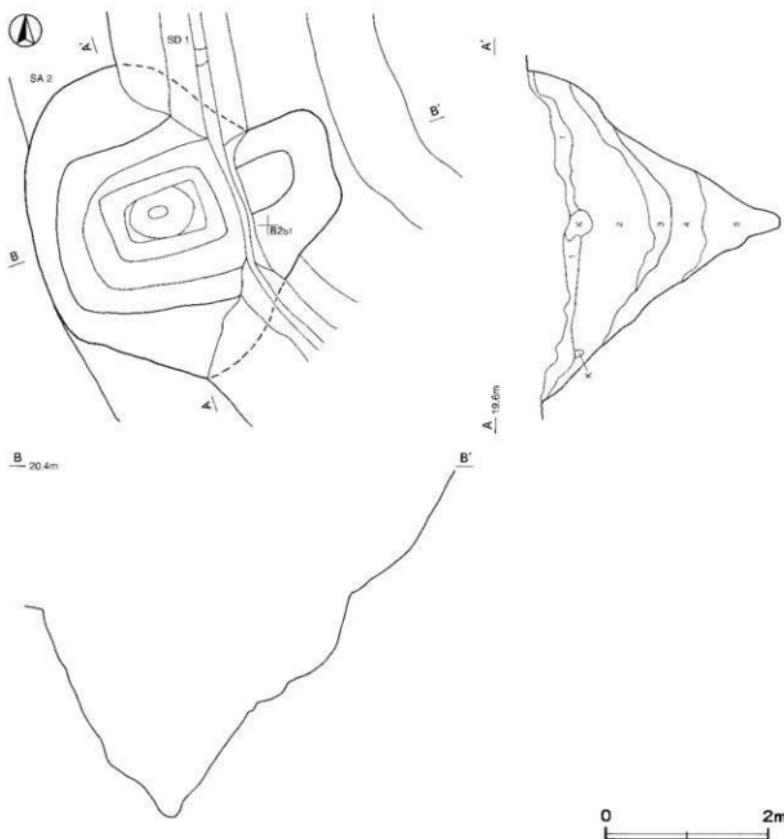
覆土 5層に分層される。第1・2層は自然堆積層、第3層は土壘跡の構築土層に似ていることから、第1号土壘を破壊して埋め戻されている。第4層は砂質粘土（見和層）を含有物とする堆積層で、第1号堀の改変にあたり、切岸をおこなった際の埋土である。第5層は自然堆積層で、堀深いされることなく、放置されてい

る。これらの覆土は、第1号堀跡の覆土と酷似しており、本土坑の第1・2層は第1号堀跡の上層、第3層は中層、第4・5層は下層に相当する。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|------------------------|
| 1 黄褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量 | 4 浅黄色 | 砂質粘土大ブロック多量、ローム中ブロック少量 |
| 2 灰黄褐色 | 粘土粒子・砂粒子中量、ローム小ブロック少量 | 5 暗灰黄色 | 砂質粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 楠褐色 | 砂質粘土小ブロック中量、ローム小・中ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片3点（鍋）が出土している。このうち1点は、第1号堀跡出土の7と接合関係にある。また、混入した縄文土器片3点（深鉢）、弥生土器片1点（壺）、土師器片3点（甕）や流入した陶器片1点（灯明受皿）も出土している。



第17図 第1号土坑実測図

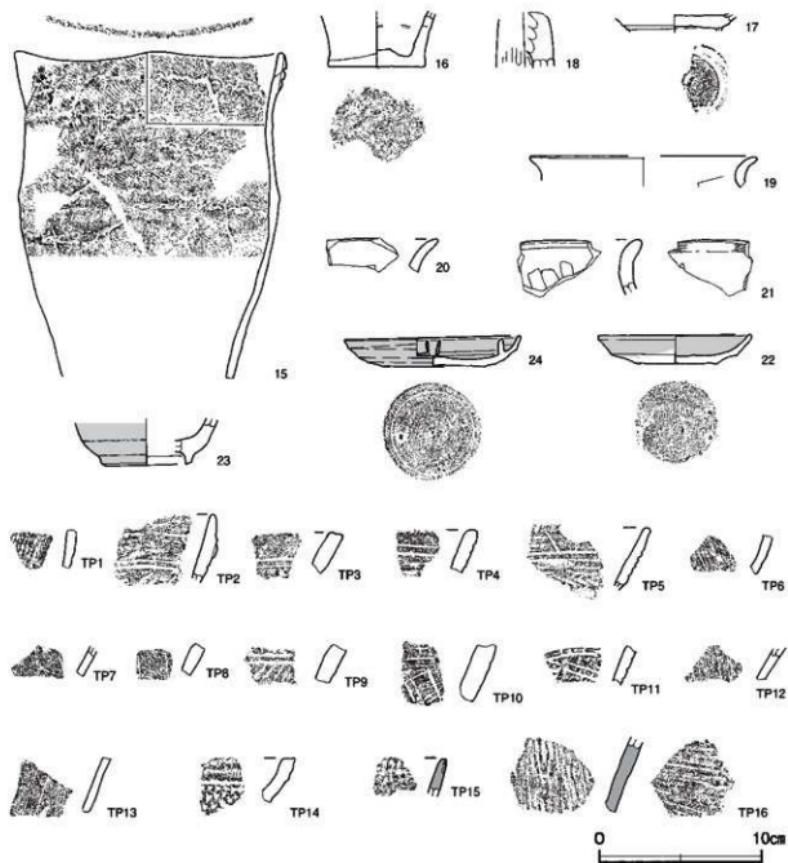
所見 重複関係から、第2号土壘や第1号堀よりも新しい施設であるが、廃絶までの経過は第1号堀と同じくしている。このことは、本土坑出土の土器片が、第1号堀跡の上層下層域から出土した内耳鍋7と接合したことや本土坑の堆積層が第1号堀跡の堆積層に酷似することからもうかがうことができる。

時期は、重複関係から16世紀前葉以降の構築で、16世紀末葉には廃絶されたものと思われる。

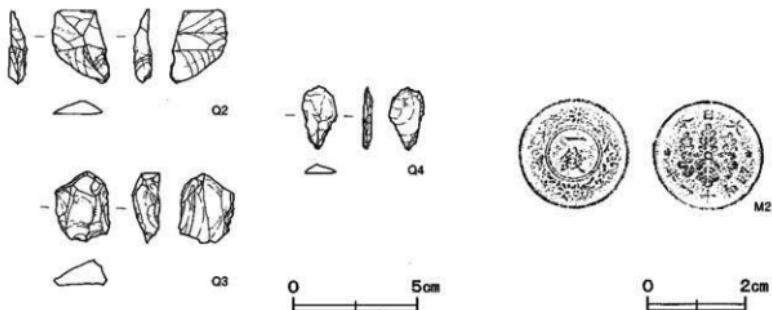
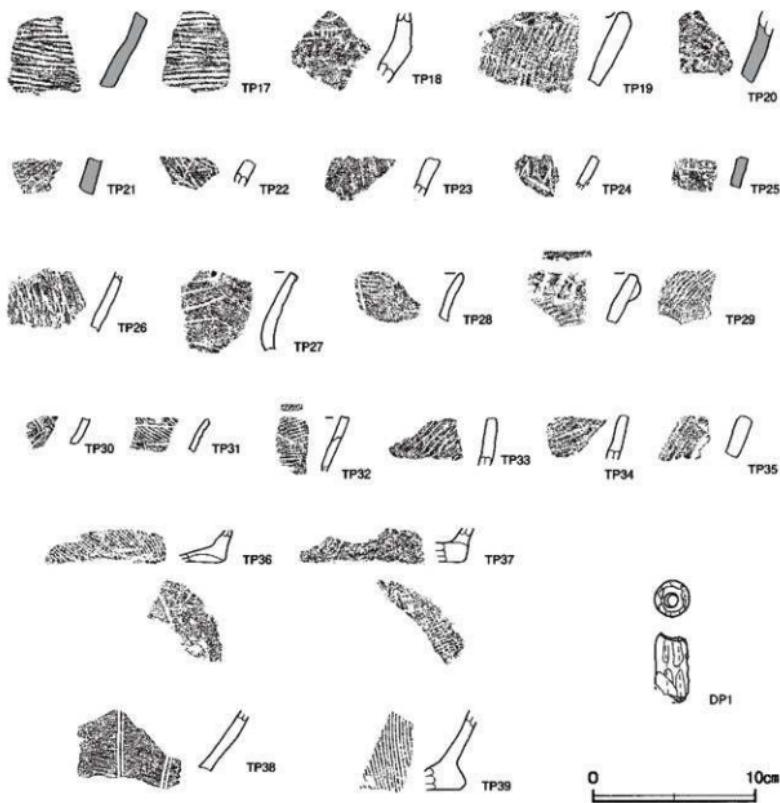
遺構の性格については、第1号堀より深く掘り込まれていることから、防御施設と思われる。

2 遺構外出土遺物(第18・19図)

今回の調査で確認できた遺構に伴わない出土遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第18図 遺構外出土遺物実測図(1)



第19図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物觀察表（第18・19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
15	弦生土器	壺	[162]	(20.1)	-	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色	普通	口縁部折衷 口沿下部に附加条 横縫文	口縁部折衷 口沿下部に附加条 横縫文	第1号曲輪内 第3層中	後期前半 PL7
16	弦生土器	壺	-	(3.5)	60	長石・石英・雲母 赤色粒子	橙	普通 無文	腹部内面輪横痕	SK1 屋入	後期前半 PL7
17	土師器	直白付壺	-	(1.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	ロク口成形	第1号曲輪部 表土	中期後半 PL7
18	土師器	高环	-	(3.4)	-	赤色粒子	橙	普通	高环部上面貼り付け痕 外面部ミガキ調整 内面部輪横痕	内第1号曲輪部 表土	中期後半 PL7
19	土師器	要	[13.6]	(1.8)	-	長石・石英・砂粒	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	SD1 屋土中	中期後半 PL7
20	土師器	要	-	(2.1)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	SD1 屋土中	中期後半 PL7
21	土師器	要	-	(3.5)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外側輪底矢切り 内面横ナデ	SD1 屋土中	古墳後期
22	陶器	壺	9.3	1.8	50	長石・石英	にぶい黄 良好	ロク口成形 底部折衷 脚付	脚付 脚付 脚付	SA1 表土	19世紀後半 PL8
23	磁器	小碗	-	(2.9)	[48]	長石・黒色粒子	灰白	良好	ロク口成形 底部折衷 付付	SK1 屋土中	17世紀後半 PL8
24	陶器	灯明受皿	10.8	1.9	60	長石・石英	赤褐色	良好	ロク口成形 底部折衷 脚付	SD1 屋土中	19世紀後半 PL8

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
TP 1	繩文土器	深鉢	長石・石英	明褐	撚り文	SD1 屋土中	早期前葉 PL7		
TP 2	繩文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	前で小さな波状口縁 横位1条の隆筋付り付け 横位2条1半 位の沈文及び斜位2方向の粗沈文	SD1 屋土中	早期中葉 PL7		
TP 3	繩文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	横位2条の沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉 PL7	
TP 4	繩文土器	深鉢	長石	橙	横位4条の沈文	田口下刷式	表探	早期中葉 PL7	
TP 5	繩文土器	深鉢	長石・石英	橙	横位の沈文及び斜位の沈文	田口下刷式	表探	早期中葉 PL7	
TP 6	繩文土器	深鉢	砂粒	橙	縦位の細沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉	
TP 7	繩文土器	深鉢	長石	橙	縦位+斜位の細沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉	
TP 8	繩文土器	深鉢	長石・石英	橙	縦位の細沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉 PL7	
TP 9	繩文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	横位2条の沈文及び斜位の沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉 PL7	
TP10	繩文土器	深鉢	赤色粒子	橙	横位の沈文及び斜位の沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉 PL7	
TP11	繩文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	横位の沈文及び斜位の沈文	沈縫間に刻文 田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉 PL7	
TP12	繩文土器	深鉢	長石	明赤褐色	斜位の細沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉 PL7	
TP13	繩文土器	深鉢	長石・石英	橙	斜位の細沈文	田口下刷式	SD1 屋土中	早期中葉 PL7	
TP14	繩文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	口縁部ナデ	横位1条の沈文	沈縫間に刻文	表探	早期後葉 PL7
TP15	繩文土器	深鉢	長石・石英・織維	にぶい褐	口縫に沿って2列の刻文	SD1 屋土中	早期後葉 PL7		
TP16	繩文土器	深鉢	長石・石英・織維	にぶい褐	外前縫位の貝殻柔軟文	内面横位の貝殻柔軟文	SD1 屋土中	早期後葉 PL7	
TP17	繩文土器	深鉢	長石・石英・織維	橙	外・内面横位の貝殻柔軟文	子母口+子母口+茅山下刷式	SD1 屋土中	早期後葉 PL7	
TP18	繩文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	沈縫文及び横位押し+引剥文	諸葛A式	SD1 屋土中	前期後葉 PL7	
TP19	繩文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	綴やかな波状口縁	多条繩文 開山式-黒浜式	表探	前期後葉 PL7	
TP20	繩文土器	深鉢	長石・石英・織維	にぶい黄橙	綴繩文	開山式-黒浜式	SD1 屋土中	前期後葉 PL7	
TP21	繩文土器	深鉢	長石・石英・雲母・織維	明赤褐色	無跡繩文	開山式-黒浜式	SD1 屋土中	前期後葉	
TP22	繩文土器	深鉢	長石・赤色粒子	橙	V字状の貝具文	浮鳥-開津式	SD1 屋土中	前期後葉	
TP23	繩文土器	深鉢	長石・石英	橙	V字状の貝具文	浮鳥-開津式	SD1 屋土中	前期後葉	
TP24	繩文土器	深鉢	砂粒	橙	V字状の貝具文	浮鳥-開津式	SD1 屋土中	前期後葉	
TP25	繩文土器	深鉢	長石・石英・織維	にぶい褐	V字状の貝具文	浮鳥-開津式	SD1 屋土中	前期後葉	
TP26	繩文土器	深鉢	砂粒	にぶい黄橙	V字状の貝具文	浮鳥-開津式	表探	前期後葉 PL7	
TP27	弦生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	口縁部貼痕	織ぬ状工具による円弧文	SD1 屋土中	中期後半 PL7	
TP28	弦生土器	壺	長石・石英・雲母・織維	にぶい黄橙	地文不明(附加条1種)	織ぬ状工具による施紋	SD1 屋土中	中期後半 PL7	
TP29	弦生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	口縫端及び内・外面附加条1種	口縫部外側に貼痕 上縫合式	SD1 屋土中	後期後半 PL7	
TP30	弦生土器	壺	砂粒	にぶい橙	織ぬ状工具による瓶区画文	足洗式2~3式	表探	中期後半 PL7	
TP31	弦生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい褐	織ぬ状工具による瓶区画文	足洗式1種	表探	中期後半 PL7	
TP32	弦生土器	壺	長石	にぶい橙	附加条1種	表探	PL7		
TP33	弦生土器	壺	長石・石英	橙	附加条1種	表探	PL7		
TP34	弦生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	附加条1種	表探	PL7		

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP35	弥生土器	壺	長石・石英	明闇	附加条1種	表探	
TP36	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい褐	側部附加条1種 底部木葉痕	SD1 覆土中	PL7
TP37	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい褐	側部附加条1種 底部布目痕	SD1 覆土中	PL7
TP38	瓦質土器	罐鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	内面2条1単位の櫛歯状工具による彫り目	第1号曲輪跡 瓦土	16世紀代 PL6
TP39	陶器	罐鉢	長石・黒色粒子	にぶい黄褐	内面10条1単位の櫛歯状工具による彫り目が密 外面鉄輪跡 行進し	第1号曲輪跡 表探	19世紀以前 PL8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 1	管状土器	42	22	0.8	14.8	砂粒・雲母	両側からのナゲ調整 一方向からの穿孔		SD1 覆土中	PL8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 2	鋸片	30	23	0.7	295	チャート	縦長鋸片 表面に複数方向からの削離痕 裏面に一方向からの削離痕	SD1 覆土中	PL8
Q 3	鋸片	29	23	1.2	698	瑪瑙	縦長鋸片 表面に複数方向からの削離痕 裏面に一方向からの削離痕	SD1 覆土中	PL8
Q 4	石鏃	26	14	0.4	129	チャート	未製品 裏面押圧削離	表探	PL8

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 2	銭貨	23	-	0.1	357	銅・錫・亜鉛	表:菊に唐草 貨幣単位 裏:国名 発行年 標	表探	明治5年以前 PL8

第4節 ま と め

今回の調査によって、戦国時代の曲輪跡や掘立柱建物跡、土塁跡、堀跡などの良好な遺構を確認した。出土遺物は少なかったものの、時期は16世紀に限定される。しかし、発掘調査で得られた考古資料は宮田館跡のわずか空間であり、宮田館の全像に迫ることは極めて困難である。併せて、宮田館における文献史料や伝承も余りに少なく、宮田館の性格を知る上では、当館の本城にあたる小川城を居城した園部氏の動向や周辺領主との関係、古地図や地名から得られる情報を総合的に照合していく必要があるものと思われる。

本節では、こうした視点から宮田館における普請、歴史的様相、景観復原を記載してまとめとする。

1 宮田館の普請について

戦国時代における城郭の普請は、占地、造作、作事の手順をおってなされる^①。文献史料においては、「普請（造作）奉行」と「作事奉行」の名称が室町時代頃からみられるようになり、城館の普請においては、造作と作事が異なる者の指揮によっておこなわれていたものと考えられている^②。また、「半造作の城」として記録が残る武田勝頼の最後の城といわれる新府城では、城郭が整っているにもかかわらず、城跡の規模の割には建物跡の発見が少ないという発掘調査の事例もみられる^③。作事の途中段階で武田氏が衰退していく結果といえる。

占地とは城館をどこに築城するかということである。当館跡においては、第1・2号曲輪跡や第1号掘立柱建物跡の立地から園部川下流域や大塚氏の支城である竹原城などを眺望できる地点であるとともに、府中（石岡市）や殿塚館・笠原館からの交通路を意識して占地がなされたと考えられる。このことからも対大塚氏への築城であり、同氏の動向を警戒し、進入路を遮断する目的から築城されたことは明確である。また、園部川下流域を望める地点に築城されていることから、河川や陸路を利用した流通をも意識しているものと思われる。

造作は占地した地点に繩張りをし、城郭を構築することである。『教王護国寺文書』には、室町幕府四歳の赤松氏が木山城の普請に30人、高倉城の普請に40～60人の人夫を派遣していることが知られており、また『瓦林正頼記』には鷹尾城の堀・土居の普請に50～100人が、芥川山城の普請には300～500人が労役に従事している⁴⁾。作事における人夫数は城館の規模に応じて定められるものと考えられる。

今回の調査では、曲輪跡2区画を調査したほか、踏査によって1区画の曲輪跡を確認した。これらの曲輪跡は大塚氏の所領に対して連郭を呈した繩張りになっており、堀跡によってそれぞれが分断された構造になっている。調査した地点においては、大塚氏の正面にあたる部分に深い薬研堀である第1号堀を掘削し、その外縁に第2号土塁を構築して防御をしている。さらに第1号土坑を付け加える改修をおこなっている。この第1号土坑は第1号堀や第2号土塁を掘り込んで後設されているが、第2号土塁の外縁をわずかに残して掘削しており、城外からは見えない構造になっている。屋代B遺跡において、同様の土坑が堀跡のコーナー部分から確認されていることから⁵⁾、本土坑も落とし穴の性格を持つものと考えられる。

また今回の調査では、造作の様相も明確になった。第1号曲輪跡の調査では整地層（第6図）を確認したことから、占地、繩張りをした後、台地上を削平し、平場を造成している。第1号土塁においては、構築土層が整地層の上面に盛上されていることから（第11図）、平場の造成後、外縁に沿って土塁を構築し、第1号曲輪が成立したことが確認されている。そして第1号土塁の構築土層においては、各層位の含有物が基本層序の層位と逆位（下層位からローム層、茨城粘土層、見和層のブロック）で堆積していることから、第1号堀の掘削土を利用して第1号土塁を構築したものと理解される。第2号土塁においても、第1号堀の掘削土を利用して構築されているが、構築土層の多くには砂質粘土（見和層）ブロックが含まれることから、第1号土塁の構築後、継続して第2号土塁が築かれたものと理解される。

以上のことから、当館の造作においては、第1号曲輪を造成した後、第1号堀を掘削しながら、土塁の構築がなされたものと判断される。第2号曲輪においては、大きく擾乱を受けているため、造作については不明であるが、当館が地形を利用して築城されていることや交通路を意識した地点に第2号曲輪が構築されている点を考慮すれば、第1号曲輪と同時期の造作と思われる。

作事とは城郭が構築された後におこなわれる建物の造営であり、建築事業のことである。当館における作事は、第1号掘立柱建物跡のみが確認された。造作から作事へ移行する普請のあり方から、城郭が整った後の構築と考えられる。また、宮田館がもつ特性である大塚氏の動向や交通路の視察に加えて、攻め手に威圧をかけられる地点に構築されたものと考えられる。

2 宮田館における歴史的様相

宮田館における歴史的記録は、『小川町史』上巻に「天文18（1590）年小川城落城後、幡谷城主の子孫が住み、宮田九郎兵と称した。その後府中大塚氏系の者が住んだ」とあるのみである。発掘調査では16世紀前葉の遺物が出土していることから、これ以前には築城されていたものと思われる。しかし、戦国時代における宮田館については不明な点が多く、歴史的様相を考える上では、当館の本城にあたる小川城に拠点をおいた園部氏を中心に、その周辺勢力である小田・大塚・江戸・佐竹諸氏の動向をみていかなくてはならない。

園部氏と小田氏の関係は『新編常陸国誌』にみることができる。天文年間に大塚氏へ娘を送り誼を通じたことから小田氏の反感をかい、天文14（1546）年に菖蒲沢（石岡市）にて謹慎した。しかし小田氏はこれを許さなかったことから、翌15年、園部氏は小田氏一族が入城していた小川城を奪還し、江戸氏に属した。

のことから園部氏は、遅くとも 16 世紀前半までは、小田氏に属していたものと考えられる。園部氏が謹慎した菖蒲沢は旧八郷町に所在しており、恋瀬川の上流域にあたる。恋瀬川や園部川の上流域にあたる旧八郷町一帯は、永禄 9（1568）年に佐竹氏に割譲されるまで比較的安定した小田氏の所領であった⁶⁾。恋瀬川下流域には大塚氏の所領である府中が所在することから、小田氏は霞ヶ浦へ注ぎ込む園部川流域に交易路を求めたと思われ、園部川左岸域の羽鳥・鶴田を経由して、小川地域へと進出していったと考えられる。

園部氏は、武藏国北企郡園部村を本貫地とした藤原氏の庶流とされてる⁷⁾。園部氏が小川城へ入部するには、小川城主であった小川氏が没落する永徳（1381～1383）年間以降とされるが⁸⁾、不明な点も多い。小田氏の園部川流域への進出によって、その配下に組み込まれたと考えられるが、文献史料の上では、小川城主としての園部氏が確認されるのは、16 世紀に入った文亀 2（1502）年の府中總社に寄進された三十六歌仙絵馬の裏書きである。

園部氏が、遅くとも 16 世紀初頭には小川城へ入部したこと、小田氏の園部川流域における交易路は一応確保されたと考えられるが、園部川右岸に所領を維持する大塚氏には刺激を与えたものと思われる。小田氏と大塚氏とは鎌倉時代以降、基本的には対立関係にあったが、16 世紀初頭においては園部川下流域での対立は見受けられない。このことは 15 世紀後葉以降、水戸から南進する江戸氏と両氏との対峙に求められるものと考えられる。文明 13（1481）年の小幡城（茨城町）をめぐる攻防では、両氏は笠間・真壁氏などとともに江戸氏を撃退し、享禄 4（1531）年の鹿の子原合戦（石岡市）でも協力関係にあった。『小田城家風記写』には天文 2（1533）年、石岡城主として小田氏一族の名がみられることから、大塚氏の府中城、あるいはその近辺に大塚氏が小田氏を招き入れたものと思われる。小田氏と大塚氏の対立は、これ以降再発することとなる。

園部川下流域に着目すれば、天文 6（1537）年に田余砦（取手山城）や永禄 2（1559）年に竹原城が、大塚氏によって園部川・沢目川右岸に築城された。田余砦の立地は、園部川を挟んで小川城の近接する地点に、竹原城は河川の流通を押さえるように園部川左岸の台地に築城された。このことからも大塚氏における園部氏の所領包囲が目的と考えられる。こうしたなか、先述した園部氏の小田氏離脱、小川城奪還、江戸氏に帰属への動向がみられるのである。そして園部氏が江戸氏に属した翌年から、小川地区や園部川下流域をめぐる大塚氏との攻防が半世紀にわたって激化していくのである。

天正 18（1590）年、豊臣氏が後北条氏の小田原城を包囲すると、佐竹氏は豊臣方へ参陣するが、大塚氏や江戸氏は後北条氏と結んで参陣しなかった。こうしたことが、後北条氏滅亡後の関東仕置に影響し、佐竹氏によって大塚・江戸氏は滅亡に追い込まれ、江戸氏に属した園部氏も廻断されたのである。さらに佐竹氏は、鹿島・行方地方を支配していた大塚氏一族の三十三館主を謀殺したが、これに対して天正 19（1591）年には大塚氏の残党が蜂起した。現小美玉市内においても、芹沢氏（大塚氏一族）に属した小橋山館や飯岡の館、園部氏に属した立開城（天正年間に芹沢氏に組み込まれる）などで、佐竹氏との交戦が記録や伝承で残っており⁹⁾。佐竹氏によって滅ぼされている。

当館跡の調査では、出土遺物が 16 世紀に限定される。また出土量は調査面積の割には少なく、当該期においての貴重品や威信財とされる陶磁器の出土はみられず、土師質土器からなる日常雑器による器種構成であった。このことからも当館は拠点的城館ではなく、園部氏の支城と判断され、また城主の生活空間は別に所在したものと考えられる。

当館跡の構築年代は明確でないが、第 1 号堀跡の下層から出土した土師質土器から 16 世紀前葉には築城されていたものと判断される。この時期は園部氏の小川城入部が文献史料によって確認される時期から大



第20図 戦国時代における園部川下流域相関図（国土地理院 50,000 分の 1「石岡」「玉造」より作成）

大塚氏が園部川右岸に田余砦を築いた時に該当する。園部氏においても園部川左岸に宮田館や中根城が所在しているが、これらの支城においては園部氏が小川へ入部した頃には、城館ネットワークによって既に小田城まで繋がっていたものと考えられ、築城されていた可能性が高いと思われる。むしろ、大塚氏の園部川右岸域での築城が、園部氏の支城の改修を促したと考えられる。

第1号堀跡の下層は16世紀前葉から後葉に堀の改修がされたことを示している(第13図第19~21層)。この時期は園部氏と大塚氏の抗争が激化した時に相当する。大塚氏が田余砦を築いて以来、大塚氏と江戸・園部氏の抗争の主体域は小川地区であり、このことによって宮田館における守備の動員は、減少していたものと推測される。大塚氏による竹原城の築城は16世紀中葉のことであり、宮田館における第1号堀の改修と関係するものと考えられる。宮田館における築研堀は城館を守備するには有効であるが、その維持においては堀渡いを常時おこなわなくてはならず、少人数での築研堀の維持は困難と思われる。このことから、第1号曲輪側の壁部に切岸を用いた工夫がなされたものと考えられる。

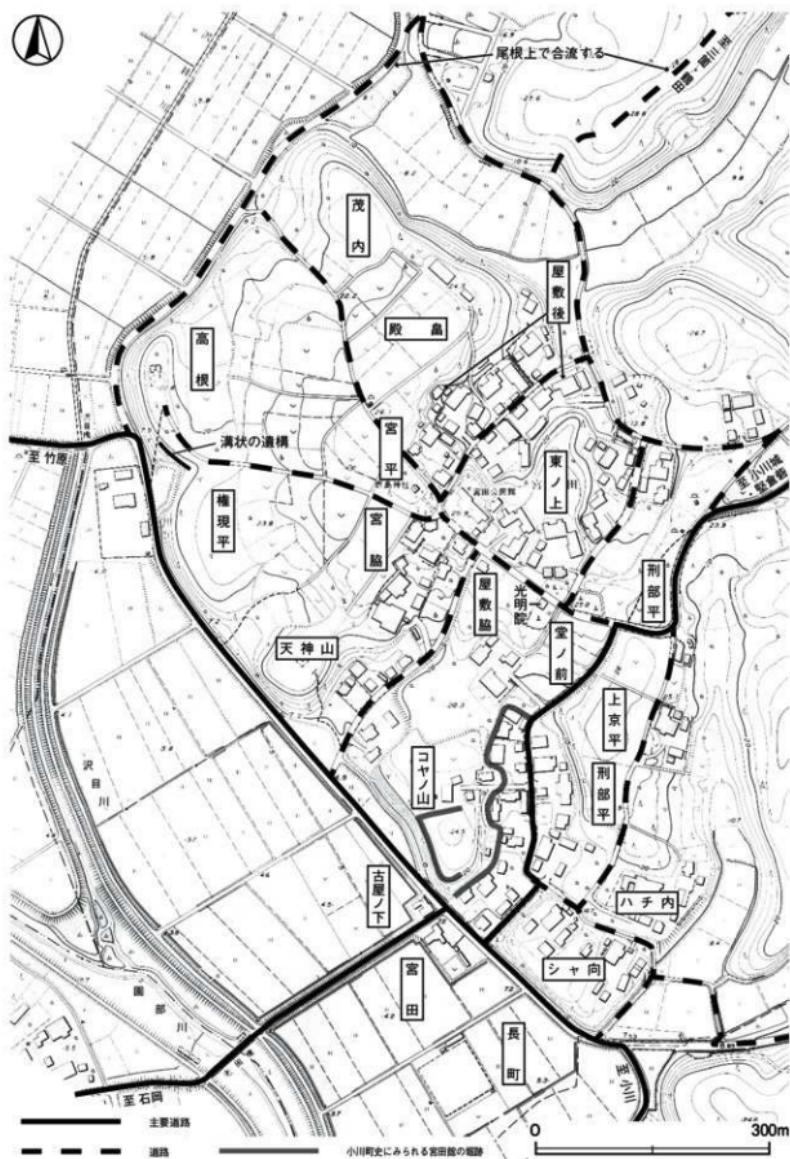
さて大塚氏による竹原城の築城は16世紀中葉であり、宮田館の築城よりも遅い時期にある。このことから宮田館の築城においては、同じ竹原地区に所在する中郷城を意識した可能性がある。『美野里町史』では「高家戦場府日記」や「中郷城責軍談」などから、竹原城築城以前に竹原氏を名乗る土豪が、中郷城を居城とした記載がみられる。また、「南城高家錄」には、天正元~2(1573~74)年の佐竹氏を中心とした勢力と府中大塚氏との合戦についての記録がみられ、大塚方として土豪竹原氏の「中郷城」と大塚氏系竹原氏の「竹原の館」とは区別して記されている。そして、土豪竹原氏の存在は、中郷に所在する永福寺の「寺院開創原由等書上」や風林寺の中興開山の由来にも登場するのである。中郷城が竹原城の築城以前に存在したとするならば、大塚氏がおこなった竹原城の築城は、園部川を円滑に渡河しておこなわれたと考えられ、当城の立地が園部川に接する台地上に立地していることから、園部氏に対する包囲網を狭めるとともに小川方面の兵力の分散を図ったものと推測される。そうした意味では、竹原城は宮田館からあえて見ることができる地点に築城することで、園部氏に威圧をかけたものと考えられる。

第1号堀跡の中層は16世紀後葉から末葉にかけての第1号土壘を壊して埋め戻したことによる堆積層である(第13図第8~18層)。当該期においては、佐竹氏がおこなった三十三館主への位置きに対する大塚氏残党の蜂起があげられる。宮田館においては宮田九郎兵の後に大塚氏系の者が住んだとされることから、大塚氏残党の蜂起に関与したことが示唆される。一方、全国的におこなわれた豊臣氏の破却令の影響とも考えられる。当館跡の調査においては焼土層などの痕跡は確認されておらず、戦乱に巻き込まれた可能性は低いものと考えられる。

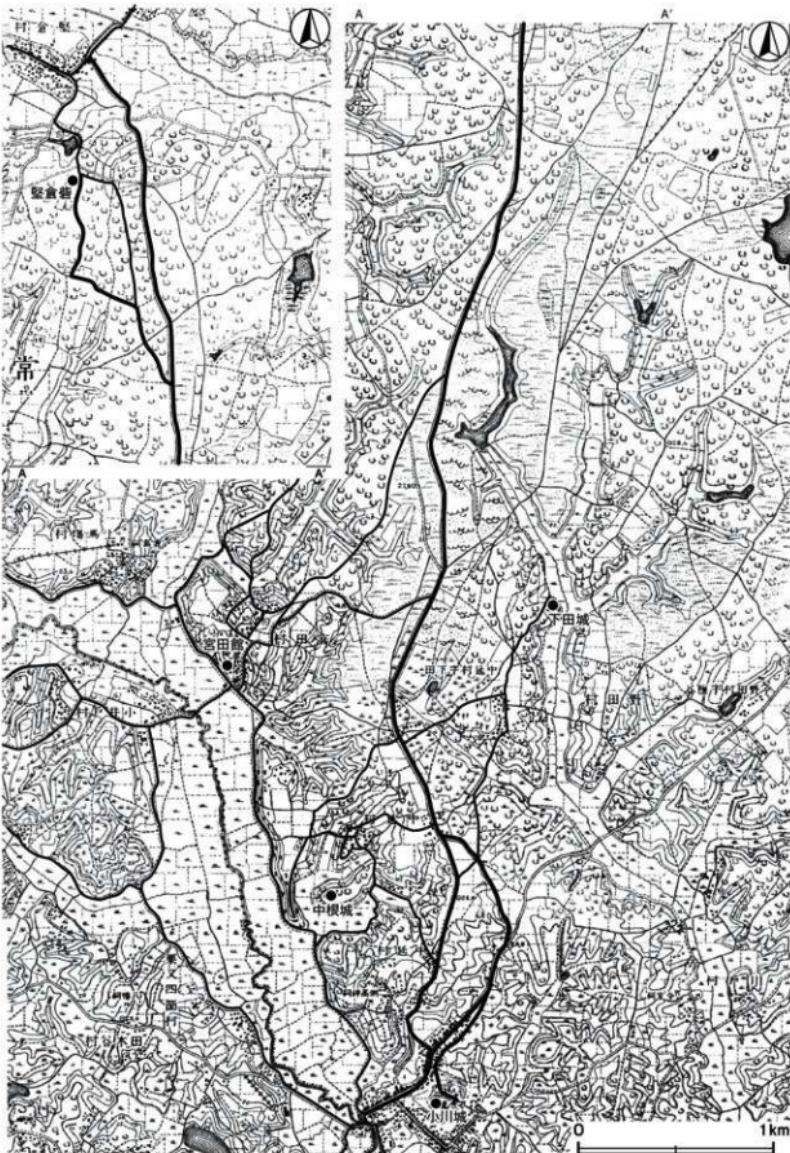
当館跡においては出土遺物が少ないながらも、第1号堀跡の中層に集中しており、特に内耳鍋が第1号曲輪から土壘の崩し土とともに投げ込まれている。大塚氏残党の蜂起に宮田館が使用されたかどうかは不明であるが、当館の終焉は無血的な破却によるものと思われる。

3 宮田館における環境復原

第21図は小川都市計画図の宮田地区に、『第一師地方迅速測図(明治30年修正版)』『竹原村』『高濱村』で確認される道路、『字切り図』や『小川町史』から地名を記入したものである。道路においては、現在の主要地方道玉里水戸線とは大分異なっており、現在の石岡市や竹原地区から延びてきている道路は、宮田地区の縁辺や内部を経由して、小川や堅倉へ向かっている。このことは、戦国時代からの景観をほぼ残しているといえ、宮田館においては陸路の要所であったことがうかがわれる。そして宮田地区においては、



第21図 宮田館跡景観復原図（小川都市計画図2500分の1より作成）



第22図 戦国時代の推定道路（国土地理院「第一師地方迅速測図 竹原村・高濱村」より作成）

こうした道路が現在の宮田公民館付近に集合しており、その付近には「屋敷脇」「屋敷後」「殿畠」の地名が確認され、着目される。中世の城郭においては、日常的空间とともに宗教的空間や構造物を有している場合がある¹⁰⁾。公民館の南東部には「天文十二（1543）年運慶」銘の如来座像や室町から戦国期に製作された阿弥陀如来立像が安置されている光明院¹¹⁾が所在し、西部には弘治元（1555）年に上馬場の鹿島神社から分霊された鹿島神社が建立されている¹²⁾。このことからすれば宮田館の中心部は、宮田公民館付近の高台に求められ、調査地点となった「コヤノ山」と同様の地形を呈する「シャ向」「天神山」「椎現平」「高根」などにおいては、曲輪や自然地形を活用した曲輪状の施設が存在したものと思われる。殊に竹原地区からの陸路の正面に位置する「高根」の山肌には、築研堀を彷彿とさせる溝状の遺構をみることができる。戦国時代においては、街道閉鎖や堅倉砦のように対立する勢力の正面のみを防御した施設や城郭が多くみられ、宮田館においても同様の特徴を有する城郭であったものと考えられる。

また、「コヤノ山」麓に位置する「古屋ノ下」は、『第一師地方迅速測図』（第22図）においても方形区画が確認できる。石岡市や殿塚館跡・笠松館跡から延びる陸路は、園部川に架かる「老田橋」を渡り、この方形区画を経由して、宮田公民館方面へと登っていく。その経路は「コヤノ山」の下でクランクを呈していることから、方形区画は枡形や馬出しを形成していた可能性があり、「老田橋」の名称については「大手橋」に由来するのかもしれない。

宮田地区においては、これらの地名のほかにも、町場の形成が推測される「長町」や官途状によって与えられる官途名に由来する「刑部平」などがみられる。こうした地名や交通路から推定すると、意外に大規模な宮田館の景観が復原され、その規模は現在の宮田地区に比定される。このような景観は宮田館と小川城の中間地点に位置する中根地区にもみることができる。

『第一師地方迅速測図』においては、園部川と鎌田川に挟まれた台地の中央部に、小川城跡と堅倉砦跡とを結ぶ道路が走っているのが確認できる。この道路からは支線状に宮田地区や中根地区、下田地区へ道路が延びており、いずれも園部氏の居城である小川城の支城が所在した集落などに該当する。園部氏支配下の在地領主における勢力範囲が想定とともに、園部氏領内のネットワークを知る手がかりになるものと考えられる。

註

- 1) 萩原三男 「中近世城郭研究のゆくえ」『栃木県考古学会誌』第30号 栃木県考古学会 2009年3月
- 2) 北垣聰一郎 「普請」「日本城郭体系」別館II 城郭研究便覧 新人物往来社 1981年5月
- 3) 註1) と同じ
- 4) 註2) と同じ
- 5) 根本康弘 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13 屋代B遺跡1」『茨城県教育財团文化財調査報告』第33集 1986年3月
- 6) 佐々木倫朗 「佐竹氏の南進と茨城北都」「八郷町史」八郷町史編さん委員会 2005年3月
- 7) 中山信名 「新編常陸國誌」嵩書房 宮崎報恩会版 1979年12月
- 8) 美野里町史編さん委員会編 「美野里町史」（上） 美野里町 1989年3月
- 9) 小川町史編さん委員会編 「小川町史」上巻 小川町 1982年3月
- 10) 註1) と同じ
- 11) 発掘調査時に、小美玉市史料館の本田信之氏より光明院の「未指定有形文化財調査 詳細調査票」のコピーを資料として頂いた。光明院の未指定有形文化財調査においては、指導者後藤道雄氏 調査員中垣真紀氏・沼尾徹氏の名称が記されていることから、氏名を相応して御礼申し上げる次第です。
- 12) 註8) と同じ

写 真 図 版



第 1 号 堀 跡 出 土 遺 物



調査区遠景（西上空から）



調査区全景

PL2



第1号曲輪跡
完掘状況



第2号曲輪跡
完掘状況



第1号掘立柱建物跡
確認状況



第1号掘立柱建物跡
掘方完掘状況



第1号土壠跡
土層断面



第1号堀跡
土層断面



第 1 号 塚 跡
遺物出土狀況(上層)



第 1 号 塚 跡
遺物出土狀況(中層)



第 1 号 塚 跡
遺物出土狀況(下層)



第 1 号 堀 跡
完掘状況(南から)



第 1 号 堀 跡
完掘状況(北西から)



第 1 号 土 坑
完 挖 状 況



SD 1-4



SD 1-6



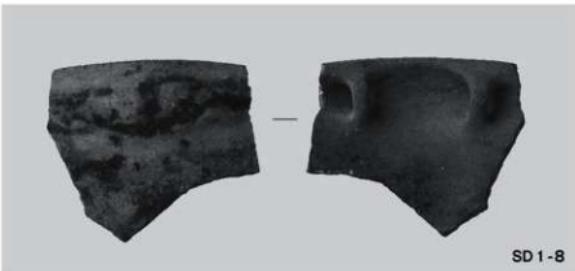
SD 1-1



SD 1-7



SD 1-14



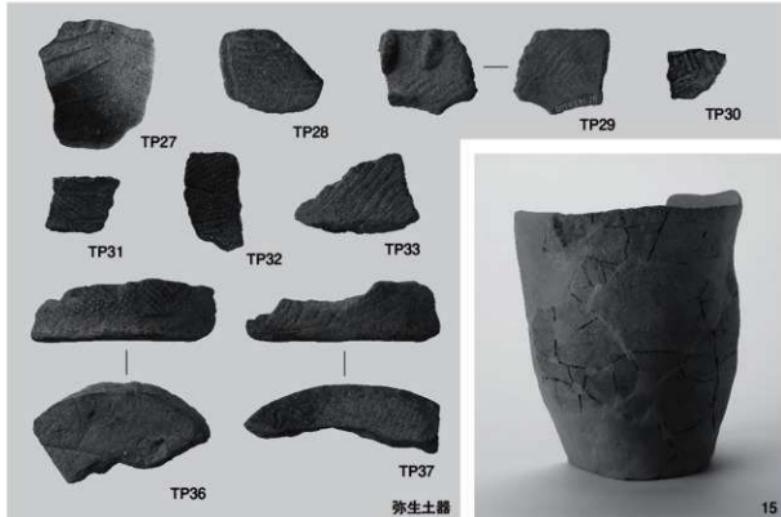
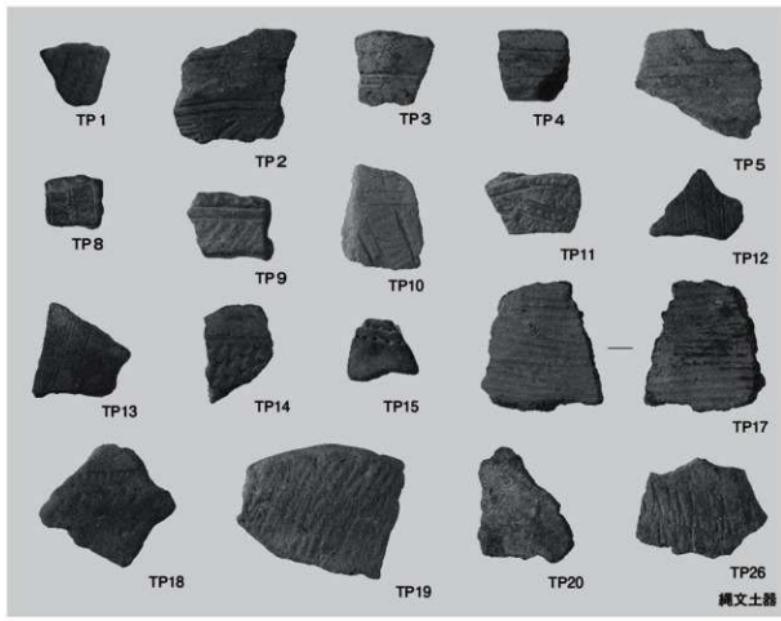
SD 1-8

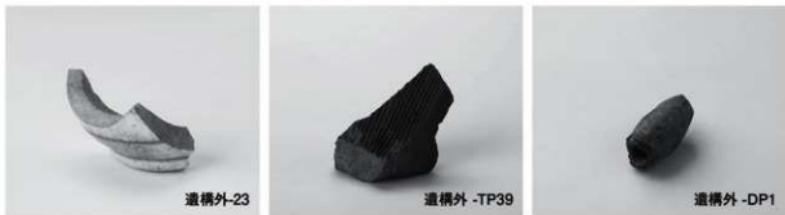


遺構外-TP38



SD 1-9





遺構外出土陶磁器、土製品、石器（石鎌・剥片）、石製品（火打ち石）、金属製品（鉄砲玉・錢貨）

抄 錄

仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7
Home Premium Service Pack 1
レイアウト Adobe InDesign CS5
図版作成 Adobe Illustrator CS5
写真調整 Adobe Photoshop CS5
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
組 版 OpenType13級リュウミンPro・L 基本
Adobe InDesign CS5
印 刷 オフセット印刷
写真製版 スクリーン線数 モノクロ175線 カラー210線
・印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトしたもの入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第374集

宮 田 館 跡

主要地方道玉里水戸線道路改良 事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年 3月12日 印刷

平成25（2013）年 3月15日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財团

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-mabun.org>

印刷 (有)川田プリント

〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53

TEL 029-253-5551